
うさぎさんの楽しい毎日

人間狂愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つむぎさんの楽しい毎日

【NZコード】

N4963X

【作者名】

人間狂愛

【あらすじ】

基本的に自己中心的な主人公がルイズ達原作キャラを振り回して、たまに仕返しされたりな日常のお話です。えつちな感じが苦手な方にはオススメできません。

第零話 からかいやすいお兄様

ゼロの使い魔の世界にキターでござりますよ。オリヰ、マジ 参上ですね。

別れた女性に滅多刺しにされて、死んだらゼロの使い魔に出てくるトリステインという国の伯爵家の次男に、何故か何故か生まれ変わっていた。二つの意味で意味がわからん。

何故、フツただけであんなに包丁でグチャグチャにされなければならぬのだろ?。何故、生前善い行いをした記憶もないのに転生したのだろう。

まあ、この際どうでもいい。無神論者だから神様とか、あの世とか、転生とか、微塵も信じていなかつたのだが、とりあえずせつかの一度目の人生なのだから、おもいつきり楽しもうと思つていてる。

前世十六年と今世五年、合わせて二十一歳になると、人間落ち着くものだ。有り得ない現実も簡単に受け止めちゃえるものです。

楽勝だ、異世界生活。

「ねえ、お兄様聞いてる? 女の子はマジで怖いよ? 女タラシのお兄様は気をつけてね?」

「タラシじゃねえよ。お前は何処でそんな言葉覚えてくるんだよ。てゆーか、それよりもっと子供らしく甘えてこいよ。まだ五歳だろ? 弟ができるって聞いて喜んでた俺に謝れよ」

イケメンの父親と美人の母親との間に生まれたイケメンお兄様は、五歳年下の僕を見て溜息を吐く。

現在、新しい家族の（「つづりと再婚したみたいだね」）兄と仲良く談笑中。家族仲は極めて良好だ。

「なるほど。お兄様は男もイケるのですね？　お母様似の僕に欲情しちゃってるんですね？」きやーたすけてー」

「違えよ。なんでお前はそういう風に話を捩曲げんの？　まだ五歳なのに反抗期なの？　いや、確かにお前は可愛いぞ。白いさぎみたいで、我が家のお姫様だ。でも俺は男には興味ないからな？」

僕の半分冗談でのからかいにも、兄は律儀に反応をしてくれる。家から出る事を許されていない僕に、兄は毎日のように付き合つてくれる。

やはリショタコンなのだろうか。いや、僕の見た目は口つだから、口リコンかもしれない。まあ、どうでもいいけど。

「そろそろ家族紹介でもしようか」

「えつ、こきなりどうした？」

僕は立ち上がりながらゆつくりと語り始める。その様子を見て、兄は不思議そうに首を傾げていた。

「」の必死過ぎて気持ち悪い金髪碧眼のイケメンが僕の兄、クイント。年齢は十歳で風のトライアングル。よく暇な時は相手をしてくれるヘタレだ」

「だからいきなりどうしたんだ？ てゆーか気持ち悪いとか、ヘタレとか」

「父親の名前はアルベルト。兄を大きくしたような容姿で、性格も兄そつくりのヘタレだが、風のスクウェアで魔法衛士隊隊長を務めている。家族大好きで親バカ＆愛妻家だ」

「 なんで無視？ えつ、なんなんだいったい？」

兄の言葉は聞き流しながら、ゆっくりと丁寧に言葉を紡いでいく。観客を前に舞台で演じるようこ、遠くまで響くように声高々に、身振り手振りを加えながら、笑みを絶やさず語り続けていく。

「母親はシルビア。僕と同じアルビノな見た目だが紫外線が効果抜群なんて事はなく普通だ。性格は基本的にのんびり屋さんだが、実力は水のトライアングル。娘が欲しかったらしく、自分に似た僕を娘のように育てている。たぶんD」

追記として、名前的に傍に感じる度幸せになれるそうな気がする。

「アリアちゃん？」

そんな僕の様子に兄は更に困惑する。誰かいるのがと豪華な部屋の中をキヨロキヨロ見回したり、僕の頭をポンポンと叩いてみたりするが、僕は気にせず語り続けていく。

「そして最後に僕。名前はアリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノ。人をからかふたりするのが趣味で、それが原因で悲惨な死を迎え、この家の次男に転生した。とりあえず一度目の人生は深

く考えず、面白おかしく過ぎ」せればいいと想つてゐる

「父上一つ！ 母上一つ！ アリアが突然妙な行動を 」

ちなみに転生したという話は、既に家族にしたのだが、父親と兄は「それで最初に喋った言葉が『あのクソアマア』だったのか」と納得し、母親は「あら、ラツキーね。一回人生を体験できるなんてすごいわ」と羨ましがっていた。シリアスなんてなかつたようです。それでも私達の息子よ、みたいな感動話の力ケラもありませんでした。

「以上。そんな風にバカな家族に囮まれて楽しく過ごしています。アリアでしたー」

「だ、誰がいるんだつ！？」

「いやかに手を振り、家族紹介を終えると、兄が抱き着きながら叫び出した。そして僕の肩を揺らしながら何度も同じ問い合わせを繰り返す。

「何が見えてるんだ？ 誰かいるのか？ なあなあなあなあ 」

揺らす兄と揺れる僕。正直ただの悪ふざけだったのだが、『うううリアクションはうざい』。幽靈でもいると思つて、怖がつているのだろうか。

「 いたつ！？」

「お兄様。齎陶しいです。離しやがつてください」

お兄様は頬をおもにつけたり叩くと、漸く身体を揺するのをやめた。僕は溜息を吐いて、そんなお兄様を蔑みながら睨み付ける。

「「、「めぐアリア つてこわつ！？」 なにその眼にわい。見下すよつに虫けらを見るよつに俺を見るな！」」

お兄様は僕の目が気に食わなかつたのか、僕の目を手の平で慌てて覆い隠す。

弱虫、毛虫、羽虫以下のお兄様には、まだマゾ属性は芽生えてないようです。弟としては安心ですが、兄にそっくりなお父様は、こうやって睨んでも喜ぶので、目覚めるのも時間次第ですね。可哀相なお兄様。

「なんで今度は哀れむよつな目で俺を見るんだ？」

お兄様は手をそつと離して、ゆっくりと覗き込むと、今度は同情する瞳に変わっていたので首を傾げる。

「世の中には知らなくていい事があるのですよ。今回の事はそれです」

「や、そつか？」

「ですです」

よくわかつていらない馬鹿なお兄様を「まかすよつ」僕は笑う。自分の将来を嘆くには、まだまだお兄様は若すぎるのですよ。

「まあ、いっか」

お兄様は笑う。自分の未来像を弟が勝手に想像して哀れんでいるとは知らず、満面の笑みで笑う。

僕はそれを見て、ひそかに涙を零した。

第一話 初体験はサディイステイックに

「」の前から子作りに励むように頑張っていた杖との契約が、漸く完了した。そういう事で早速だが、今日から魔法の練習を始めるらしい。

今日からマのつく職業ですね、と柄にもなくはしゃいでしまうのは仕方がない。魔法なんて前世では空想の中にしか存在していなかつたのだから。

厨二病患者が何度も夢見る魔法。僕も子供の頃は魔法を使って悪戯したいなんて可愛いことを考えていたものだ。

「」の日の為に、知識だけは頭に入れてある。さあ、魔法使いアリア様の誕生で「」ぞこますよー。

「」という訳で、私が家庭教師を務めるカーニバルです。よろしくお願いします。何か質問はありますか?」

二十代後半辺りの真面目そうな女性が僕を見つめながら微笑む。

吸血鬼のような名前の彼女は母親の知り合いで、兄の家庭教師でもあるらしい。実力は風のトライアングルで、兄曰く、教え方も上手いらしい。

「よろしくお願いします。お兄様の童貞は美味しかったですか?」

「ふふう　えつ、えつ？　いや、私はそんなことしてませんっ！」

質問と聞かれ、パツと思い付いた事を尋ねてみると、吸血鬼さんは真っ赤な顔で否定した。

今日も僕はいつも通り。誰が相手でも自分のやりたこととするし、母親の胎内にいた頃から決めている。

しかし、からかいがいがありそうな先生ですね。

「あのヘタレ短小包茎早漏童貞野郎にまだ手を出してなかつたのですか？ 押しに弱いので簡単に」

「！」子供がそういう話をするものじゃありません！ それに私はそういう趣味はありません！」

僕が溜息混じりに言葉を紡ぐと、吸血鬼さんは更に真っ赤になる。いい歳して結婚せずに家庭教師なんてやつてるんだから、生徒狙いのショタコンなのかと思つたら、びつやら違うみたいだ。ただのいきおくれか。

ちょっと誘惑するだけで、次期伯爵夫人は間違いないのに勿体ない。

「！」ほんつ。とにかくまずは座学から

「い。

「なるほど、これがフライですか。便利ですね、魔法つて

「つて、飛んでるじつ！？」

吸血鬼さんが仕切り直して授業を始める前に、僕は我慢出来ずに

魔法を使ってみる。暇だったから屋敷にある書物を制覇した僕に今更、座学なんて必要ありません。

「なにこのナ、……クイント君と全く違つ」

全く制御出来ない僕を呆れ顔で見つめる吸血鬼さん。僕を自由に動かすなんて、王様でも無理ですよー。

「ほつ、着地成功！」

魔法を解除して地上に降り立つ。そして両手を広げてポーズを決めるとい、吸血鬼さんは溜息を吐いた。なにやら疲れたご様子だ。

「いほんつ

さて、初体験の結果（卑猥な意味ではない）から思考を深めると、どうやら僕はちょっとやそつとでは、精神力切れで魔法が使えなくなる、なんて事はなしだ。

「いほんつ

スクウェア並に身体の中に溜まつていい（卑猥な意味ではない）だろう。前世持ちはチートだのつ。

「いほつ、あー、あー」

そんな風に考え込んでいると、咳ばらいがうるさい感じたので、ちらりと吸血鬼さんを見る。何か用があるのであれば。

ああ、そうこうとか。

「褒めてくれてもいいですよ？ 頭を撫でるのを許可します」

頭を差し出しながら微笑むと、吸血鬼さんは苦笑いをする。ビリやら違つたみたいだ。

吸血鬼さんが困つているのを見て僕は勘違いに気付いた。

しかし、そんな僕の心情を知らない吸血鬼さんは苦笑を浮かべながら何故か僕に近付いてくる。
まさか頭を撫でる気なのだろうか。

「あー、うん。すごいすごい」

僕の目の前で立ち止まり、棒読みで褒めながら頭を撫でる吸血鬼さん。うん、鬱陶しい。

「触んなです、雌豚」

僕は吸血鬼さんの手を振り払い、唾を吐き付ける。変態には「」
美だが、吸血鬼さんには「」
褒美ではなかつた為、彼女は泣き出してしまつた。

「もおー、なんのよお。こんなのが聞いてないわよ、うわーん

情けない大人だ。僕は蔑んだ眼差しで彼女を見つめる。

「ぶーぶーうるさいのですよ、雌豚。この程度で泣くななんて子供ですか。さつと授業の続きをしてくれださい。さもないと叩きますよっ！」

「うひ、ぐすつ」

僕の言葉を聞いても泣き止まない雌豚。芝生の地面に座り込んで、子供のように泣きじゃくっている。

なんとこい豆腐メンタル。

「ほら、雌豚。さつさと立ち上がれです」

「いたつ、つづつ」

横っ面を引つ叩いても彼女は動かない。僕はその様子に苛立つて、髪の毛を掴んで無理矢理立たせる。

「ペッ！」

そして顔面にまた唾を吐き付けると、彼女は更に大声で泣き叫んだ。

「うわーん、もうやだよお」

僕はそのままの状態に耐え切れず、髪を掴んで地面に叩き付けた。

「お、お嬢様ーーー？」無事で　えつーーー？」

そんな騒ぎを聞き付けてか、使用人の一人が授業をしていた庭へと大急ぎでやってくる。どうやら僕が泣いていると思つたらしく、泣き叫ぶ家庭教師を見て畠然とする。

「いつたい何があったのですか？」

使用者は恐る恐る僕に尋ねる。ちなみにこの瞬間も雌豚は泣き叫んでいる。

「かくかくしかじか」

「しかくいむーぶ、でじぞこますね？」

事情を説明すると、使用者は地面にはいつくばる雌豚を哀れんだ瞳で見つめる。先程の取り乱していた様子はなく、今は完全に落ち着いている。

「最近の若い者は根性が足りねえですね」

「肯定です。お嬢様が言つ台詞ではありますね」

「メイドさんも最近の若い者に余裕で入るけどね」

「失礼しました」

「ううう、ぐすっ、ひぐっ……、ぐすん」

地に這う雌豚を放置して、使用者と談笑をする。この使用者さんはなんだか気が合いそうな気がする。

「そういうお嬢様って男に対しての呼び方じゃないよね？」

「肯定です。ですが、奥様から呼び方が義務付けられていて、破れば解雇されてしまいます。それに違和感はないのでしょうかと」

「女装趣味の変態野郎ではないからね？」

「わかつております」

僕の素朴な疑問に即座に答える使用人。五年間不思議に思つていた謎が漸く解明された。

「あ、それと」

「なにこの地獄絵図……」

「ここでお兄様登場。草花に囲まれた縁豊かな空間で、笑い合ひの僕と使用人、泣き叫ぶ雌豚を見て言葉を漏らす。

「何やつてんだよつ！？　えつ、そこのお前（使用人）もこの状況を不思議に思わないの？」

僕と使用人に尋ねるが僕らはただ笑顔を浮かべるだけだ。

「こわつ！？　なんなお前ら？　と、とりあえず大丈夫ですか、カーミラさん？」

お兄様は僕等の反応を見て若干引きながら後ずさる。しかし、地面に這う雌豚をほって置けず、彼女に近付いて身体を支えながら立ち上がりせよとする。

「きやー、お兄様が女性を泣かせてるですぅー

「い、いけませんよ、坊ちやま。女性には優しくと

「おこいこいこい！」？

僕達はそんなお兄様を見て、事前に計画していたかのよひこ、大きな声を出して騒ぎ出す。

「どうなさいました？」

「如何なされました？」

「坊ちゃんが何でしようか？」

メイドA、メイドB、メイドCが現れた。

「い、いや、これは違つ」

お兄様は必死に言い訳しようとす。しかし、効果は今一つだ。

「坊ちゃん……」

メイド達の冷たい眼差し。
効果は抜群だ。

「なんで俺がこんな目に」

「ひして魔法体験初日は比較的平和に終わった。

第一話 赤い敗北

部屋中、桃色で埋め尽くされたファンシーな空間。この無駄に可愛い部屋が僕の部屋だ。

今、中には僕と、お兄様と、あの田仲良くなつた使用人がいる。ちなみに、名前はフランシアというそうだ。

あの雌豚はその日の内に家庭教師を辞めてしまった。そしてその件が兄ではなく僕のせいだとバレて、食事やトイレス以外自室で謹慎の上、24時間使用人に監視されている。

一応、僕もやり過ぎような、そうでないようなって感じで反省はしている。後悔はしていない。初日はもう少しソフトにやるべきだった。気分に任せて突き進んでしまうとは、僕もまだまだ子供のようだ。

「なんなお前？ カーミラさんの何が気に食わなかつたの？ 何か恨みでもあつたの？ あと俺にも」

現在お兄様による説教中。あの雌豚が好きだつたのか、珍しく囁み付いてきている。

さつさとキメておかないと後で後悔するんですよ。まあ、前に後悔しておくなんて出来ないですけどね。

「僕は気に入つてたですよ？ お兄様並に面白い玩具でしたし。あと、恨みでお兄様共々ありません」

僕はベッド（これも桃色）の上で転がりながら返事をする。良い教師か悪い教師か尋ねられると、何も教えてもらつていないし困るが、彼女はユニークだった。

「……実の兄を玩具扱いかよ」

僕の言葉にうなだれるお兄様。その様子を見て、僕は笑顔になる。

「あれですね。お兄様を虐めていると濡れます」

「おい、やめろッ！ 子供が言つ言葉じやねえよ。てゆーかアブノーマルだし、それにお前の性別じや濡れねえよ！」

僕の突然の発言に、お兄様は赤面しながら否定的な意見を述べる。前世の話をしているのに家族全員子供扱いはひどいと思う僕です。

「あら、耳年増ですねお兄様。おませさんですねお兄様。メイドで筆下ろしありました？」

「してねえよ……」

お兄様は耳まで赤く染めながら怒鳴る。

豊富な知識を褒めたつもりですが、お兄様は不満なようです。もしくは軽々しく童貞を捨てる発言がダメだったのでしょうか。『童貞も守れないヤツに女は守れねえ』って言つていた気もするですし。

「いめんなさい、お兄様」

僕はベッドの上に座つて深く頭を下げる。すると、お兄様が嬉し

そうに微笑んだ。

「漸くわかつ」

「お兄様は童貞です。生涯守つ通せるはずですか？」

「お前、兄を諂めていろだらひ?」

僕の言葉にガックリと凹み、それからお兄様は笑顔で怒り出した。

「舐めてほしいのですか?」

「違ひつゝー。」

首を傾げながら尋ねると、お兄様は即座に否定する。

「ああ、もうやつてらんない」

お兄様はそう言ひと素早く立ち上がる。

「どうしました? お暇ですか? それならジャンケンで負けたお兄様が一枚ずつ脱いでいくゲームでもしませんか?」

「脱ぐの俺だけじゃねえか!」

「僕に脱いでほしいのですか? 僕を脱がせたいのですか? もしくはフランシアを脱がせたいのですか?」

僕が問い合わせていくと、お兄様はせっかく正常な色に戻っていた顔を、どんどんと赤くしていく。

「そんな訳ないだろうがっ！」

そして静かに否定の言葉を告げる。

「もういい。俺はもう付き合つてられん」

お兄様はそう言いながら扉の方へ歩いていく。そして扉を開いて、こちらを見る。

「じゃあな、一人で遊んでる」

バタンッ。

大きな音を立てて扉が閉まる。捨て台詞と共にお兄様は逃げるよう部屋を去つていってしまった。

「僕と話をしていてムラムラしてしまって、童貞を捨てに行つたのでしょうか」

「お嬢様。それはないかと」

僕が独り言を呟くと、先程まで黙つて無言で待機していた使用人が即座に否定する。

十歳だと精通すらきていないか。それに巨大化もしないだろうじ。

僕は使用人の言葉に頷く。

しかし、それだと理由がわからない。

「女性がいるのに猥談されて恥ずかしい的な？」

「否定です」

「からかわれるのが嫌になった？」

「それも否定です」

「えつ、それはいいのか。」

「意味がわからないお兄様ですか」

僕の疑問に無表情で否と答える使用人。この様子だと彼女はお兄様について何か知っているらしい。

僕は頭を抱える。二十一年の経験を持つ僕にもわからないとは、思春期の少年は難しい。

「坊ちやまはお嬢様を心配しているのですよ。何年かすればお嬢様も魔法学院へ通いますし、そこでも同じ行動をとってしまうのではないかと。友達ができないのではないかと」

僕が悩んでいると使用人は案外簡単に理由を教えてくれた。そうか、そういうことか。

「それで茶化しながら相手をする僕に腹を立てたと？」

「肯定です」

使用者は満足そうに頷く。まさかお兄様がそんな心配をしていたとは知らなかつた。パソコンですか。

しかし友達の心配をされるのは心外だ。前世では愉快な仲間達に囮まれて楽しく過ごしていたのに。

まあ、心配してくれるのは嬉しいですけどね。

「子供の気持ちを理解するのは嬉しいですねえ」

「肯定です。お嬢様が言つ台詞ではありますんけどね」

僕が笑いながら呟くと、使用者は無表情で頷いた。心配しているなら素直に言えればわかるのに、ツンデレは難しい。

「てゆーか一人で遊んでるって言つてたけどフランシアがいるよね

僕は忘れられていた使用者に向かつて微笑む。

「肯定です。お嬢様と遊ぶ気はありませんが

「えつ？」

すると、使用者は予想外の返事をしてきた。僕が不思議そうに見つめると、使用者は首を傾げる。

「遊んでくれないの？」

「肯定です。私はお嬢様の玩具ではないので」

使用者の言葉にしょんぼりとする。なにこの生意気な使用者。

「なら、えつちこ」とでもある?」

なんとかこの使用人を困らせたい僕は、兄をからかうように笑いながら言葉を紡ぐ。

「否定です。どうしてもと言つなり泣き叫んでも止めずにイかせ続けて差し上げますが」

しかし使用人は赤面一つせず、無表情のまま淡々と返事をしてきた。しかもめちゃくちゃ怖い返事を。

「……遠慮しません」

完敗。頭を下げるなりながら僕の頭の中にはその一文字が浮かんでいた。

一 残念です。本音を言えば毎日お嬢様を犯したいと考え

「お母様助けてえ！――！」

僕は慌ててベッドから飛び出して部屋から出ようと走りながら叫ぶが、使用人はその行動を予想していたのか、僕の手を掴んでベッドにほうり込む。

そして僕の上に馬乗りになりながら、口を手で塞ぐ。

「お部屋から出でていけませんよ?」

舌舐めずりしながら呟づらわれる台詞に、僕は涙目で何度も頷く。

「それとあまり騒がないよつこ」

何度も何度も頷く。今世で最初のピンチに、僕は蛇に睨まれた蛙そのものだった。

「良い子ですね」

使用者は片手で僕の両手を抑え、もう片方の手で、僕の太股を摩る。僕はされるがままで、ビクビクと怯えるしかない。前世で経験があるのに、何故か怖くて動けない。

そして使用者の顔が僕の顔に近付いてくる。僕は怖くて目を閉じた。

一秒、一秒、三秒、四秒、五秒、六秒、七秒、……。どれくらい経つただろうか。暗闇の中で震えながら待つが、何も起こらない。

僕は恐る恐る瞳を開く。

「冗談ですよ」

使用者の顔は目の前にあった。しかし、どんどん距離が開いていく。

「もしかして期待していましたか？ 申し訳ありません、お嬢様」

僕の両手を離し、不出来なウインクをして、使用者はベッドから離れていく。

「マセガキさんですね」

僕は真っ赤な顔で俯くしかなかつた。

第三話 レッソパーティー

あの敗北から数日後。

突然だが、現在パー・ティー会場。ヴァリエールさん家のルイズちゃんが五歳になつたから、誕生日パー・ティーをやつちやいますよ的な感じで、貴族の皆さんが集められた。僕達ルチアーノ家もそんな貴族達の仲間だ。

僕にとって初めての外出は知らない人の誕生日パー・ティーなようです。

「そんな感じですにゃー」

「あらあら、そうだったの」

そして、いきなり桃色の髪のお姉さんに捕獲されて、膝の上でお話し中。お姉さんはものすごい一貫してくる。

「ウチのルイズのパーティーに来てくれてありがとうね」

「いえいえ。こちらこそ、ご招待ありがとうございます」

頭を撫でられながら首を振る。

なんだろう、この人といふとめちゃくちゃ和む。癒される。動物と仲良しな理由がわかつた気がするよ、うん。

「あ、そういえば自己紹介がまだですね。アリアです。ルチアーノさん家の次男やつてます。このドレスはお母様の趣味つて、ああ、

喉は「

「つふふ、私はヴァリエールさん家の次女のカトレアよ」

喉を撫でられ思わず「いや」となつてしまつ。

なんとこつトクーシャンツー！

「うー、じるせじまじ……」

「見た目はわざわざこんなのにね」わんみたいね

彼女は笑顔のまま僕を撫で続ける。年頃の貴族の娘さんが男にこんな事をしていいのだろうか。いくら此処が隅の方で目立たないといつても、ダメな気がする。いや、五歳程度で、しかもドレスを着ていて男に見えないから平氣か。

「ええ、気にしなくていいわよ。貴方はおとなしく撫でられてなさい

心が読まれてる。流石はヴァリエール家次女。読心術もお手のものか。

「何となくわかるだけよ」

僕は目を細めながらされがままに、快樂に身を任せる。

此処が楽園か。

「ああっー、あんた、ちい姉様から離れなさいよー！」

しかし、そんな心地良さは幼女の声で止まつてしまつ。ビューアリヤが桃色お姉さんが彼女の声に反応して、手を止めたようだ。

僕は声がした方を見る。

すると、本日の主役がそこにいた。

「あれがヴァリエールさん家のルイズちゃんですか」

「ええ、そうよ。可愛いでしょ?」

ふんすかぴーと怒りながらこちらに歩み寄る幼女を見ながら、桃色お姉さんに尋ねてみると、どうやら理解だったようだ。

主人公に御対面キターでござりますよー。

僕は幼女に微笑みながら話し掛けた。

「はじめまして、アリアです。気軽にアリア様と呼ぶ事を許可します」

す

「ルイズよ　って、いきなり様付けを勧めるなんてビューアリヤ事つ
!?

桃色お姉さんに飼い馴らされながら自己紹介をすると、幼女は良いツツノミをくれた。これは良い遊び相手になりそうな予感/D-i
ren grey。

「それよりもちい姉様から離れなさいよつー。」

幼女は僕の位置に「こ」不満な様子で、僕の腕を引っ張りながら引き離そうとする。しかし、桃色お姉さんにがつちりと抱き締められているのでびくともしない。

ところで、今更だけど桃色お姉さんってなんかエロそうだよね。

「ちい姉様って呼ばれてるのですか？ 僕はなんと呼べば？」

「じ」主人様かしら？ 「うふふ」

「私を無視するなーっ！」

唸る幼女、首を傾げる僕、笑うお姉さん、怯える僕、怒る幼女。まさかのペチトとして飼う気満々な桃色お姉さん（卑猥な意味ではない）に僕はビクッとする。

「離れなさいよーっ！」

「カトーレアに言ひてほしいです」

「じ」主人様でしょ？」

「うがーっ！－！」

幼女が唸る。ちい姉様好き好き大好き超愛してるなルイズにしてみれば、いきなり大好きな姉が盗られてしまったみたいで不満なのだろう。

「どうしたのですかルイズ。そんなに騒いでみつともない」

そんな騒ぎを聞き付けてか、招待された貴族達を搔き分けて、ルイズママ『伝説よりもチート』が現れた。桃色三色ビンゴですね。

「お、お母様。だつてコイツが

」

僕を指差しながら幼女が俯く。桃色お姉さんも僕も微動だにしない。

「おや、もしやシルビアの娘ですか？　いや、あの娘には息子しかいなかつたはずですが」

僕を見てチートが首を傾げる。確かにこんなドレスと母親そつくりの容姿ではわかりにくいだろ？

「息子です。母の趣味でドレス着てます」

「えっ！？」

僕の言葉に幼女が驚愕する。予め予想していたのか、チートは驚いていなかつたが、何故か苦笑している。

「あの娘は変わりませんね」

溜息混じりにチートが呟く。

「お母様を存知なのですか？」

「ええ、まあ」

僕は気になつて尋ねてみると、チートは肯定した。そして昔を思

い出してか、チートは微笑む。

ヴァリエールと、しかも伝説よりチートな存在と知り合ったことは、全く聞いてなかつたです。

「お母様。私、この子を飼いたいんですけど

「ち、ちい姉様っ！？」

そんな僕達の会話を聞いて桃色お姉さんが突然爆弾発言をきます。

幼女はそれに驚愕。さつきから幼女は驚いてばかりだ。

「私、この子といふと、何故か体調が良いんですね」

「コイツは人間ですよちい姉様っ！？ 確かにつきぎみたいですけど」

漫才をするように会話をしていく二人を僕とチートは黙つて見つめる。当事者の僕を置いて話がどんどん進んでいくが、僕は特に何も言わない。

だつて、どうでもいいもの。流れに身を任せるのが僕です。

そして話を聞いてチートは何度か頷くと、何か思い出したのか突然二人の間に入り込む。

「ふむ、わかりました。とりあえず私はシルビアと話をしてきます。貴方達は此処で待つていなさい」

そして、そう言い残して去つていった。

「お母様っ！？」

そんなチートの言葉が信じられず、幼女は口をあんぐりと開けながら驚愕している。

気持ちはわかる。人間を、しかも貴族をペツトにするのはどう考
えても、いや、よく考えなくともまずいだろう。

幼女は将来犬（種族人間の平民）を飼う事になるだろ？！ナビ。

「あ、あんたはなんで何も言わないのよっ！？」

依然として膝の上に乗つたまま、黙つている僕を見て、幼女が喚く。僕はそれを聞いて笑う。

「そりゃあ、現実的に次男坊とはいえ貴族の家の子供をペツトにするなんて不可能だからです」

僕の言葉に幼女は納得し、喚くのをやめて落ち着く。現実的に考
えて不可能です。

「ま、まあ、そうよね。確かに有り得ないわ

「ですです

僕が肯定すると、幼女は安心したのか可愛らしく微笑む。そして最初の話題を思い出してか、僕の腕をおもいつきり引っ張り出す。

「てゆーかあんた、いいがげんにちい姉様から離れなさいよ」

「カトーレアが離してくれにやーのですよ」

僕達が話していのを見ながら、あらあらうふふと頭を撫でる桃色お姉さん。こうこうのも両手に花と言ひのだらうか。

とりあえず手を引っ張るな、幼女。実際ものすごく痛いです。

しかし、まさか恋愛フラグではなく、ペシトフラグが立つとは予想外だったです。いや、恋愛に興味はないんですけど。

「ちい姉様あ！」

「うふふ

「の、喉はりめえ

喚く幼女、笑うお姉さん、悶える僕。

僕等はこんな感じでパーティーを過ごしたのだった。

第四話 K-Y（空氣読みません）

朝の食事後、爆弾発言が飛び出した。

「……突然だが、来週からアリアはヴァリエール家で生活する事になつた」

泣きながら喋るお父様。これが僕の父親で、この国の魔法衛士隊隊長です。

食事中から様子がおかしいと思っていたら、そういうことか。それにしてもどんな交渉をすれば息子をペツトとして預ける事を、この家族大好き人間に認めさせたのやら。

「どういう事だよ、父上…？」

そんなお父様の言葉に当然、納得がいかないブロッコンお兄様は、机を叩きながら立ち上がりお父様に問い合わせる。

「家庭教師はアリアが辞めさせちゃつたし、次の家庭教師もどうせアリアの相手はできないだろうから、カリーヌさんに魔法教育をお願いしたのよ」

そんなお兄様の疑問にお母様が答える。僕はそれを聞いて納得した。

ペツト兼弟子か。

「で、でも

「もう決まったことだ。男らしくアリアを見送る準備をしろ」

納得せずに抗議しようとするお兄様を止めるお父様。貴方めちゃくちゃ泣いてるじゃないですか。

流石はファミコン（ファミコンプレックス）。せっかく過保護に育ってきた息子が来週から魔窟入りですものね。

「使用者のフランシアを世話役として連れていけ。風邪には気をつけろよ？ 寂しくなつたらいつでも帰ってきていいからな？」

お父様が泣きながら話す言葉に一つだけ納得がいかず眉が吊り上がる。あの使用者には勝てる気がしないので、できればもつと扱いやしい使用者が良いのですか。まあ、言つても無駄ですかね。

「私も一週間に一度はヴァリエール家にお邪魔するからね？」

しかし、僕の心情を気にすることなく、話しさは進んでいく。

お母様は僕を膝に抱えながら笑う。怪物に娘のように愛する息子を送るつていうのにめちゃくちゃ笑顔ですね。どうですか。

「まあ、なんとかなるですよね」

ぎゃーぎゃーついにい男一人と、笑顔が黒いお母様を見て、僕は咳く。

田指せチート化。

時間が経つて来週がきた。

場所も変わって、ヴァリエール家。

「どうも。アリア・ド・ルチアーノです。攻撃力2300 守備力1500で、必殺技はギャラクシービンタ。好きなラーメンはチャーシュー麺。好きな乳製品はいちごオレ。好きなケーキはいちじょうショート。将来の夢はブリタニアをぶつ壊すことです。どうぞよろしくお願いします」

「アリアお嬢様の世話役として来ました、使用人のフランシアです。お嬢様の事は深く考えないで相手してあげてください」

二人一緒に頭を下げる。ヴァリエール家一同に囲まれながら挨拶をしてみるが、カトレアさんがニコニコしているだけで、他の全員はみんなぽかーんとしていた。

「あー、おほん。よろしく頼む」

髭を生やした厳ついオッサンが咳ばらいをしながら言葉を絞り出すと、それに続いて全員自己紹介をしていく。

髭公爵、チート、眼鏡、アニロン（アニマルコンプレックス）、
幼女、ちい覚えた！

「ルイズ。アリア君に屋敷を案内してやつなさい」

「は、はいお父様」

髭公爵が告げると幼女は椅子から立ち上がり、僕の目の前に立つ。使用人が僕の後ろに立っているので、サンドイッチにされた気分だ。

「ほら、行くわよ。私が案内してあげるんだから感謝しなさい」

「ギャラクシービンターザー！」

「へぶつー！？」

何となく腹が立つたので、必殺技を発動してしまった。倒れる幼女を見て、幼女の家族は突然の事に唖然として、全く反応ができるない。

「ほら、行くですよロコビッチ。案内させてやるから感謝しろです」

そして僕はそんな幼女を引きずりながら部屋から出ていく。それに使用人も続く。

部屋の中からは騒ぐ髭公爵と宥めるチートの声が聞こえているが気にせず、どんどん廊下を進んでいく。

「は、離しなむよー！」

幼女は喚いている。

離しますか？

はい

いいえ

「ちよ、弓をはずらないで、わざわざ離しなさい、弓、ちよ
とい」

雑音をシャットアウトしながら先へ進み、使用人も黙つて付いて
くる。トリステインーの演算力（自称）は伊達ではない。

「離しなさいってばっ！」

幼女が僕の腕を引っ搔く。ふむ、そろそろ離してやるか。

「あばつー？　何すんのよー！？」

パツと手を離すと幼女は顔面を強打するが、彼女はそれを気にせ
ず、すぐに立ち上がる。なかなか鍛えられているようだ。流石チー
トの娘。

「あんた、こんな事していいと思つてるの？　私は由緒正しき弓
ヴァリエール公爵家の三女よ？」

幼女が偉そうにない胸を張る。僕はそれを見て鼻で笑つた。

「な、何がおかしいのよ？」

「幼女は別に偉くねえですよ。女は家督を継げません。次期公爵は
長女の婿となるでしょう。では幼女、貴女はどうなるのですか？
いずれ誰かに嫁ぐのですよね？　それだとヴァリエール家ではなく
なりますよ？」

「肯定です。それに家柄の話をすれば、カリーヌ様は弱小貴族出身らしいですね」

よくあるアンチ的な台詞を五歳の幼女に言つてみると、使用人もそれに続く。しかし、いくら頭が良くて子供には難しかつたらしく、首を傾げている。

「と、とりあえず私の名前は幼女じゃなくてルイズよっ！　あとお母様を馬鹿にしたら許さないわよ！？」

睨み付けながら怒鳴る幼女。家族想いなのは良い事です。

「お嬢様もこれぐらい可愛げがあればよろしいのに」

幼女を見つめながら使用人が小さな声で呟く。合計二十一歳の大人に無茶言わないでください。

「さて、とりあえず案内してほしいのですが」

僕は仕切り直して、幼女に案内を求める。すると、幼女はまた無い胸を張り、威張りながら声を出す。

「いいわよ。着いてらっしゃい」

そして一人先にズンズンと進み出した。

「僕らも行くですよー」

「肯定です。公爵家の三女を一人にするのはあまり良くないかと思われ」

僕達も後を小走りで追う。幼女のペースは速いが歩幅は狭いので、すぐに追い付いた。

さあ、子供らしく探検といこう。

大きな庭、城のようなというか完璧に城な屋敷の中、寝室、食堂、トイレ、個人の部屋、使用人室、遊戯場、訓練場、一日で全て見回るのは無理と諦めるまでいろいろな場所を見て回った。

ルチアーノ家の何倍あるか知らないが、流石トリステインーの貴族という感想を送ろう。豪華さも広大さも完敗だ。別に勝負してないけど。

「此処は私のお気に入りの場所よ！」

そして最後に原作でお馴染みの、小船が浮いている池に案内された。此処でサイトとルイズが乳繰り合っていたのか。

「これだけ案内すれば後は大丈夫でしょう」

そう言って幼女が芝生に寝転ぶ。僕も同じように寝転ぶことにした。使用人は流石に立つたままだ。

「まあ、アレよ。これからは、な、なな仲良くしてやつてもいいわ

よ？一応今日からあんたも一緒に住むんだし

夕日に照りされながら、その夕日が原因でない赤面をしながら、幼女は素直じゃない言葉を述べる。

それを聞いて僕は笑い、使用人はそんな僕達を嬉しそうに見つめていた。

「だが断る」

「えっ！？」

しかし僕は笑顔で拒絕することにした。驚く幼女と、予想通りと言ったそうな表情の使用人。

「こには『うん、よろしく』とか言って、夕日をバックに握手したりするところじゃないの？！？」

「肯定です。空気を読んでください」

「ところがどっこい、KY（空気読まない）で有名なアリアさんは、気まぐれな気分屋です。思い通りにいかないのが僕という存在なの

ですよ」

溜息を吐く一人に、僕は満面の笑みで答えた。

第五話 女王様より女王様

とてもなく広いヴァリエール家の敷地内には訓練場所もあるみたいで、今日から始まる僕の魔法訓練は、そこを使って行われるそうです。

目の前にいるのはトリステインの伝説のメイジ、烈風のカリン二と、カリーヌ・デジレ・ド・ラ・ヴァリエール。

彼女は杖を構え、仏頂面で僕を見下ろしている。

「さて、今日から私が貴方を鍛えます。反論は許しません」

まだ子供の僕に対して、大人でも腰を抜かしそうな威圧感を醸し出しながら、彼女は僕を睨み付ける。

だが、僕は脅えたりなどしない。

どう考えてもあの変態子供好き（性的な意味で）の方が怖いからだ。

あの阿婆擦れを忘れない限り、僕は戦場ですら恐怖を感じたりしないだろう。

女にされてしまいそうになる恐怖なんて感じるとは思わなかった。

あんな事がないように兄と容姿を交換する、もしくは髪を切つたり服装を変えたりして男らしくなりたい気分だ。

お母様が許してくれないので確実に無理だろうけど。

「せんせー、質問ですです」

右手を大きく上げて呼び掛ける。

なんとなく学生時代に戻った気分だ。

「はい、なんでしょう」

それに対しても彼女は表情一つ変えずに返事をした。

そして僕はその返事を聞いて笑顔で彼女に質問をする。

「ルイズはおやつに入りますか？」

「（ ）。（ ）」

「あ、間違えた。ルイズは一緒に教わらないのですか？」

定番の質問である『バナナはおやつに入りますか？』が頭に過ぎ
つて、質問内容と混ざってしまい、おかしな質問をした事で公爵婦
人は物凄い表情をした。

そして、威厳なんて知らん、というその表情を笑わないように訂
正すると、彼女はすぐに咳ばらいをして、仕切り直し、元の仏頂面
に戻る。

「え、ええ。ルイズには家庭教師を雇っていますから」

「それで拗ねたりしないですか？ 私もお母様に教わりたい的な

彼女に追加の質問をすると、彼女はむつとした表情をした。

「いえ、あの娘はむしろ私からの指導を拒絶しましたから」

苛立ちながら話す姿に苦笑いをする。

そして小さな声で、「死にたくなかつたんですね、わかります」と呟いた。

「何か言いましたか？」

風のメイジ「じくあむらんと聞」いていたようだ、僕は笑顔で「」ま
かす。

「空耳、もしくは聽覚障害です。クソババア」

訂正、おちよぐる。

「い、今なんど？」

僕の言葉を聞いて、彼女は杖をへし折りそつなぐらい力を込めて握り締めている。

僕はその姿を見て笑顔のまま話を続ける。

「じうやうやんと聞」いてるみたいですね。わざわざ授業をお願
いします」

「は、はい。そうですね。うふふふふ

濁つた瞳で僕を見つめながら妙な笑いをする公爵婦人。

これは確実に怒っているようだ。

しかし彼女はすぐ様荒い呼吸を静め、いつも通りの動作に戻る。
ルイズとは違い『大人』はすぐに癪癪を起こさないんだなあ、と
僕は関心した。

「ではまずは座学を」

そして何事もなかつたかのように授業は再開された。

しかし座学と言つ言葉を聞いて僕は話を聞くのをやめる。

もう僕に座学は必要ないのだ。

それを説明する為に何か魔法を使つて証明するといよつ。

「ユキビタス・デル・ワインデ」

「（ 。 ） 「

なんとなく使用してみた風のスクウェアスペル、偏在は無事成功し、僕は一人に分身した。

それを見て彼女は啞然とする。

「なんとなく」

「できましたー」

「夢だけど」

「夢じゃなかつたー」

二人交互に話すと公爵婦人は頭を抑えながら僕を信じられないものを見る目で見る。

バファリン使うですかー?

「せ、流石はシルビアの息子。常識が通用しませんね

ドン引きしている烈風のカリン。

「そんなに褒めないでください」

「照れちゃいますから」

「褒めてません」

「「ふーふー」」

彼女は呆れながら否定した。

僕達はそれにブーイングをするが、彼女は気にした様子はない。

「とりあえず貴方は既にスクウェアレベルの精神力を持っているようですから、呪文の暗記でもしていなさい。それが終わり次第実戦

訓練をします

そして取り繕いながら僕に命令を下した。

「あんちゅう見ながりつて格好良くありますか？」

「気分は千の呪文の男…」

「わかりましたね？」

「「はーー」」

睨まれたのでおとなしく返事をする。

なんでこの人いちいち怖いんだろ？

子供にぐらぐら優しくしてほしい。

ヴァリエールの領民は怖くて彼女に近付けないのでないだろうか。

平民の子供は睨めたら心臓が止まるのではないか。

彼女を妻にしたヴァリエール公爵は本気で尊敬する。

偏在を解除しながら僕はそんな事を考えていた。

「よろしい。いつか貴方も戦場に立つのですから、呪文の暗記は必須ですよ！」

「大丈夫です。平民を盾にします」

「（ 。 。 ）」

「冗談ですよ」

「そ、そりですか」

「盾にするのは貴族です」

「（ 。 。 ）」

彼女の驚愕するなんて珍しい表情を見たのは今日何度だろつか。

「嘘ですよ」

僕は眼を反らしながら答える。

「絶対にやつてはいけませんよ？」

「押すなよ絶対に押すなよ、ですか？」

「フリではありません!」

「はーい」

ぶんすかぴーと怒る彼女を見て、僕は礼儀正しく返事をした。

ちなみに戦場に出て死にそうになれば、平民だろうが、貴族だろうが、王族だろうが、男だろうが女だろうが関係なく例外なく、僕

は誰かを盾に自分の命を守ります。

「あ、ギャグ補正で生き延びてくれるでしょう。」

「我が最愛のお兄様なら生き延びるじゃんか」ホルフのよつこ魔法を反射できるかもしません。

「……はあ、本当にシルビアによく似ていますね」

僕がニヤけているとチートさんが溜息交じりに言葉を紡ぐ。

「お母様は昔はどんな方だったのですか？」

僕は可愛らしく小首を傾げながら愛らしげな表情で尋ねる。

「その仕草も似ていますよ」

チートさんは僕を見て笑った。

「シルビアは……そうですねえ。とにかく狡賢い娘でした。そして王族だろうが大貴族だろうが例外なく自分らしく接する人間でした。ぶん今もそうでしょうけどね」

「自分らしく？」

「ええ、マリアンヌ様なんて跪きいて脚を舐めさせられていたわ

それを聞いて僕はドン引きした。

本物の女王様を奴隸にしての女王様プレイなんて女王様過ぎる。

ドリだ。

そんなお母様に似ているなんてひどい暴露としか言こといつがない。

「それに魔法の才能も素晴らしいかったわね。サボり癖さえなければ私なんかよりもずっと素晴らしいメイジになっていたでしょ」

僕は何も言わない。

ただ聞き始めのワクワクした態度とは真逆の心底嫌そうな表情で母親の知りたくなかった話を聞き続けている。

「貴方のお父上はそんな彼女の一番の犠牲者でした。魔法で切り刻まれ、禁止されている魔法の実験台になり、誰もが同情していましたねえ」

お父様がドMなのはお母様の調教の結果なのですか。当然なのですか。

僕は更にげんなりとする。

「貴方はそんな両親から生まれたんですよ」

嬉しくない。全然嬉しくない。

「ですが、あの二人のよつには育たないよつて清く正しく成長してくださいね」

苦笑を浮かべながら言われた言葉に、僕は力強く何度も頷いた。

いたからね少し血腫じよい。

第五話 女王様より女王様（後書き）

初期設定ではアリアは女の子でした。わざわざ男にしたのは百合好きっていうか百合な作者が男の娘×女の子から女の子×女の子を好きになつてもうえないのでかなあとか考えたからです。

嘘です。本当は僕つ娘で書いていたら男の娘になつていただけです。

第六話 僕とルイーズと時々メイド +

危険なフランシア

「なんかこう……、世界中が鼻で笑うようなくだらないことがしたい」

「なにそのくだらない願望」

『JRJRJR』とベッドの上で言つた僕の独り言に、椅子に座りながら本を読んでいたルイーズが呆れながら突っ込む。

くだらないとは失礼な。

「僕は王族も貴族も平民も、みんな関係なく、全員を笑わせたいのですよ」

キリッとした真面目な表情でルイーズの方を見つめながら言葉を紡ぐ。

「その言葉だけ聞くと立派よね。その前に言つた言葉で合なしだけど」

しかしルイーズは態度を変える事なく残念そうなもの見る目で見つめ返すだけだった。

「肯定です。お嬢様はもつ少し考えて発言を」

「うるせいでさよ、ショタ！」

そしてフランシアが畳み掛けるように僕に説教をしようとするが、僕はそれを遮る。お説教は勘弁です。

「しようたこいつて何よ？」

僕の言葉を聞いていたルイズが首を傾げる。僕はそれを見て『姿や動作は可愛らしいが性格が残念だよね』と心中であまり関係ない事を呟いた。

「ねえ、なあに？」

「幼い少年を性的に愛する変態でいることを

いつまでも答えない僕に苛立ちながらルイズがもう一度尋ねると、僕の代わりにフランシアが答えた。

ルイズはそれを聞いて顔を真っ赤にする。耳年増発見です。

「な、ななな」

「もちろん、私はショタコンではあませんよ。ただのロココンです」

顔を赤らめながら焦るルイズにフランシアは更に追撃する。

「えつ？」

それを聞いて僕は思わず声をあげてしまった。

「ふ、ろりこん？」

ルイズは理解できなかつたのか不思議そうな表情でフランシアを見る。

「幼い少女を性的に愛する変態でござります。ぶっちゃけた話をさせていただきますと、生まれた瞬間から一十歳になるまでの女性が私の守備範囲です」

「え？」「え？」

無表情で淡々と告げる使用人の言葉に僕達は揃つて疑問を浮かべる。

……同性愛者？

「ガチレズと呼ばれる同性愛者ですね。あ、お嬢様は別ですよ？」

僕の予想は当たつていたが、更に斜め上の追加も存在した。
えつ、狙われてるの？

僕は数日前の事を思い出してすぐにベッドから離れ、ルイズの後ろに移動する。

「あばばばば」

「あ、あんた、なんて使用人連れてくるのよ！」

ルイズも脅えているようで、僕の身体を揺らしながら焦り出す。

「僕は男だから幼女の方をオススメするですよー。」

「ちょ、あんた、普通は男なら女を守る場面でしょー…？」

「む、無理！　あの人ガチで怖いから！」

「いつも人を振り回してん癖に！…！」

「受け身は苦手なのですよー。」

ぎゃーぎゃーわーわーと喫きながら、僕達はお互いを生贊にしようと彼女の前に突き出しあり。

そんな僕達の様子を見て、フランシアは溜息を吐いた。

「心配しなくても手を出さうなんて考えておりません」

その言葉を聞いて僕達はぴたりと止まる。

「ほ、本当に……？」

「ええ、本当に」

ルイズが恐る恐る尋ねるとフランシアは笑顔で頷いた。それを聞いて僕達はお互いを抱きしめ合いながら、ほつと安心する。

「そういうば、この前のアレも冗談だったもんね」

僕は胸を撫で下ろしながら彼女に笑い掛ける。すると、彼女も同

じょうに僕に向かつて微笑んでくれた。

「 いえ、私がガチレズで口リコンなのは事実です」

舌舐めずりをしながら蛇のようすに僕達を見定める目に僕もルイズも身体が強張る。

「 助けてーつ！」

そして次の瞬間には二人一斉にドアを開いて、一団散に駆け出し、全力疾走で逃げ出した。

「 子供というのは本当にからかいやすいですね」

僕達がいなくなつた部屋にはクスクスと一人で笑う使用人がいた
そつな。

エレオノールの悩み

エレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・プロワ・
ド・ラ・ヴァリエール。ヴァリエール三姉妹の長女で、現在16歳。
魔法学院に通つてゐるらしいが、現在休暇中で実家に帰つて來てい
る。

そんな彼女が何故か僕をじつと見つめたまま動かないのは何故だ
らうか。

「あんた名前は　」

「アリアです。アリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノ。
気軽にアリア様でいいですよ？」

「なんで私があんたを様付けで呼ばなきゃいけないのよ」

観察していたような瞳が睨む目付きに変わる。流石烈風のカリンの娘と言った感じの威圧感を沿えて。ちなみに、ぎやーぎやー喚くルイズよりも落ち着いているが、こめかみに青筋が浮かんでいる事から、相当怒っているのがわかる。

口調は落ち着いてるけど、表情は今にも噛み付いてきそうな程獰猛だし。

「あんた、確か男よね？」

殴り掛かりそうになつてている握り拳を反対の手で掴み、怒りを抑えながら尋ねるエレオノール。金色の髪がメティュー・サミティにうねり出しそうだ。

「ああ、服装ですか？　お母様の趣味です。似合いますか？」

僕はそんな様子を気にせず、スカートをふわりと翻しながら一礼をする。

「それ、嫌じゃないの？」

僕の行動を見てエレオノールは理解しがたいものを見る目で僕を

見る。

オカマやひつだと勘違いしているのでしょうか。

「嫌ではねえですよ。自分の服装や髪型を気にした事はないですか
ら。あ、でもパンツスタイルが似合わないのはちょっと残念ですね。
スカートは寒いので」

ひらひらとスカートを摘み上げながら苦笑を浮かべる。

女の子になりたいなんて考えた事はないが、男らしくなりたいと
考えた事もない。この格好が好きという訳ではないが、嫌いという
訳でもない。つまり、どうでもいい。

僕の言葉を聞いて、エレオノールは溜息を吐いた。

「あんたに聞いつとしたのは間違いだったみたいね」

「何をですか？」

「えっ、いや……その、」

エレオノールは僕の質問にしまった、といつ顔をする。

おそらく何か悩みがあつてそれをバレずに相談したかったのだろう。

「何か悩みがあるのなら僕が解決してあげましょ。恋のキューピ
ッドなんかもお任せくださいです」

「なつ」

僕の言葉にエレオノールは顔を真っ赤にする。

まさかの恋愛相談ですか。

前世では紹介しても全カツプル上手くいかなかつた僕ですが、今回ばかりは独神エレオノールを救つて差し上げましょう。

「友達の話なのだけれど」「

エレオノールは恥ずかしそうに語り出す。

友達の話＝自分の話な法則ですね。

30分掛けでエレオノールが語った内容によると、こんな感じでした。

?学院に好きな人がいる。

?その人が女の格好をした弟の話ばかりする。

?もしかしたら『そつち』の趣味なのかもしれない。

?振り向かせるにはどうすればいいのだろう。

?ついでに参考の為に貴方の兄の好みの服装とかタイプとか教えてほしい。

まさかのフラグ！

どう考へてもエレオノールが好きなのは僕のお兄様ですね。

「…………」

無言で僕の答えを待つエレオノール。

どうすればいいのだろう。

「えっとおにい　じゃなくて、たぶんその人はストレートですよ。ただ家族が好きなだけかと。だから普通に女の子が好きだと思います。それと振り向かせる為には積極的が一番だと思います。あと、お兄様の好みのタイプとかは知らないです」

「そ、そう?　じほんつ……そうね、友達にも言つておいてあげるわ」

エレオノールは嬉しそうにニヤけるが、僕が田の前にいる事を思い出すと取り繕いながら「まかすように咳ばらいをする。

「ま、まあまあ参考になつたわ。たぶん友人も感謝していると思うから」

そしてそのまま急ぎ足で立ち去つていった。

後日、兄から女好きの変態とエレオノールに罵られたと手紙が届くのはまた別の話。

第七話 美WALK、健康に、美しく！

「う～む～ぎ～美～味しい～ふふふ～ふ～ん」

「共食いですか、お嬢様」

「人間です」

貴族の食事は豪華だ。

そしてボリュームもある。

それがどういう事かわかるだろ？

このまま魔法もあまり使わず、運動もせず、屋敷の中でうだうだしていたら、すぐにマリコルヌ《ごぶたさん》になってしまいう事だ。

ルイズがお姫様に会つ為に王城に向かつた後、暇になつた僕はすぐ行動を開始した。

庭を散歩するという苛酷な肉体労働を。

ちなみに伯爵家の次男でしかない僕はお姫様の遊び相手に相応しくなく、また男を姫に近付けるのは好まれず、ヴァリエールの知り合いだからと王城について連れていつてもらえる事はなかつた。

ルイズが聞いた話では王城で勤務する者曰く『シルビアによく似た子供なんてアンリエッタ姫様に近付ける訳にはいかない』だそうだ。

ルイズから言われた『あなたの母様何したのよ』といつ言葉に返す台詞は僕にはなかつた。

まさか女王様に女王様プレイした事あるらじこよ、なんて子供に話す訳にはいかない。

「お嬢様なら世間知らずな姫様なら一日で従順な犬に仕立てあげられるでしちうね」

「いや、僕をそんな生糞のサディスティック調教師みたいに扱わないでくれないですか？ 僕はそんなみんながドン引く果てしないドS野郎じゃないよ」

「『J冗談を。お嬢様は奥様そつくりですよ?』

「……知りたくなかつた現実を大画面3Dで見せられた気分だよ」

変態メイドはいつの間にか着いてきていた。

何処に逃げようと発見され、『お嬢様のお世話係ですから』と行動を共にする伝えてきた。

使用者らしく後ろを歩いてくるのだが、気分はハイエナに追いかけられるバンビだ。

「心配なさいずとも、お嬢様の純潔を初体験なのに外で散らせる気はありませんよ」

それは外じやない場所でいつか散らせてやると宣言していくよう

なものではないのか。

僕は返答を聞くのが怖いから聞かなかつた。

しかし微笑む彼女の姿を見て、聞かなくても答えはわかってしまった。

前世で女性に一般的に酷いと言われる事をし過ぎたのが原因なのだろうか。

助けてブリミル様。

「穏やかな気分で散歩したいなあ

「私が邪魔だと言いたそうですね？」

「言わなくてもわかってくれるなんて優秀だね

「ありがとうございます」

「わかつてゐなうさうとこの世界から消えてくれればいいの」「元の

「あ、失礼。この場からではなく世界からも消えて欲しいと思つて
いるのはわかつていませんでした。まさか雇い主の子息様に『死んでほしい』と思われていたのは想定の範囲外です」

彼女は無表情で淡々と告げた。

真顔で死を願われている事を知つてもダメージなんて負つていな

い。

「マイツに弱点なんてあるのだろうか。

「ねえ、フランシア?」

「はい、なんでしょうか」

「君にもやつぱり弱点はあるの?」

「肯定です。私も人間ですから。弱点のない人間など存在しないかと思われます」

そんなチート野郎も実は結構いると思つけどね。

「それは何?」

僕は彼女を上目遣いで見上げながら首を傾げて尋ねる。

すると、彼女は心底嫌そうな表情で告げた。

「男です。髭なんてとてつもなく気持ち悪いですね。ぶよぶよな身体をした豚も身体を鍛えている筋肉質なゴリラも汚らわしいです。まだ目覚めていない赤子や枯れた爺なら許せますが、下半身直結型のエロ男には触れられる事すら許せません。そんな事になりそうなれば私は自害します。ああ、汚らわしい。世の中の男なんか全て死に絶えればいいのに。何故あんなものがこの世界に存在しているのでしょうか。ブリミル様も根絶やしにしておいてくだされば良かつたのに。もしくはブリミルも男だつたのでしょうか? それなら私はブリミル教徒さえやめたくなりますね。毎晩ブリミル様に世界中の男を根絶やしにしてほしいと祈るのもやめます

歩きながら息継ぎなしで語られた言葉に僕はげんなりとする。

生糀のレズ野郎じゃないですか。

「すごい肺活量だね」

「ルチアーノ家の使用人たるものこれぐらいは当然でござります」

ルチアーノ家の使用人は化け物か！

「あ、お嬢様は別ですよ？」

できれば別にしないで欲しい。

あれで呼吸一つ乱さないタフな肉食獣の相手なんか務まらない。

「しかしあれだね。流石はヴァリエール家、庭もとてつもなく広い

話を変える為に話題を提供する。

いつまでも変態の性的な趣向の話を聞きたくないし、そんな話では盛り上がりがない。

「肯定です。領地もルチアーノ家とは段違いですしね」

メイドも僕の心情を察したのか、話題に乗ってきてくれた。

「ひいう僕の意図が理解できたり、仕事がめちゃくちゃできるところは優秀だ。

これでまともな性格だつたら言つ事がないのに。

あと、振り回しやすい弱点も欲しい。

「あら？ あの馬車は公爵様のですかね？」

メイドの声を聞いて前を見ると、そこには贅沢装備を施した馬車が屋敷に向かつて走っていた。

「朝から色街にでも行つていたのですかね？」

「お嬢様は貴族を何だと思つてゐるのですか？」

「魔法が使えるお金持ち」

貴族の義務ノーブレス・オブリージュとか今のハルケギニアには戦争の時に最後までアルビオンの王党派だった貴族にしかないのでないだらうか。

平民を奴隸として扱うトリステイン。金儲けばかり考えるクルテンホルフ。

お金で貴族になれるゲルマニア。

現状よりも贅沢な暮らしに釣られて反乱を起こすアルビオン。無能王の駒となるだけのガリア。

貴族ではないが貴族すら食い物にして私腹を肥やすロマリア。

いや、僕にはどうでもいいけどね。

自分が良ければそれでいいクズだから。周りの人間を玩具扱いする性悪だから。

積極的に悪事を起す訳ではないが、関わる気もない。

「楽しければそれでいい！」

「こきなつどうなさいました？」

メイドは突然宣言した僕を怪しげな目で見る。

僕はそれに笑顔で返す。

「どうあえず公爵の馬車を爆破しましょ」

「流石にそれはまずいかと。こせなり何をおっしゃってこののですか？」

「暇なんです！ 散歩は飽きたのです！」

「暇だからと公爵家に喧嘩を売ろうとするお嬢様の思考回路が私は理解できません」

「考えるな……、感じるんだ！」

「いえ、とにかくダメなものはダメです

メイドの言葉に溜息を吐く。

じつせなり王族に生まれたかった。

やうすれば『面白くなかったら打ち首パーティー、ポロリ（首が）

もあるよ』とか開けるの』。

「あれですね。奥様がお嬢様に何故わざわざ世話係をつけたのか漸くわかりました。お嬢様を守る為ではなく、お嬢様から守る為でしたか」

メイドは通り過ぎる馬車を見つめながら呆れたように呟く。

「お嬢様、屋敷に戻りましょう。暇ならカトリア様がお相手してくださるでしょ」「う

「あの人苦手です！」

「大丈夫です。流石に首輪を付けたりとかは自重してくれるでしょ
うから」

「えっ、何の話？」

「いえ、以前カトリア様から『どうじつ風にあの子で遊ぶのがいい
かしら』と相談されまして」

なにそれこわい。

「いや、僕はもうひとつと散歩を

「それとそろそろ昼食の時間です」

運動したらお腹が空く。

「それなら僕達も戻りますか」

ヴァリエール家の食事は我が家より美味しい。

だからちゅうどぐらー我慢しよ!。

僕は馬車が向かった方向に足を進めていく。

メイドもそれに後ろから着いてきた。

「私がおばさんになつたら、貴方はゴブガリよ」

「機嫌ですねお嬢様。いえ、歌の意味は理解できませんが」

「考えるんじやない」

「感じる、でござりますね?」

「つとー。」

でゅーべすつとーくで帰った後の『飯は大変美味でございました。』

第八話 カトレア動物園

蛇、鳥、狼、犬、猫などの地球上にしかいない生物や、ハルケギニアにしか存在しない幻獣まで、ご飯を食べた後に連れて来られたカトレアの部屋の中はたくさんの生き物が溢れていた。

「動物園でも開くのですか？」

「ダウブッシュン?」

「世界中の動物達を集めて檻に閉じ込めて見世物にする為のお店ですよ」

「あら、この子達はお友達よ？」

ベッドに腰掛けながらカトレアは優しくふんわりと笑う。

彼女の部屋は公爵家の間とは思えないほどの質素さだ。

確かに物の一つ一つは高級品なのだろうが、物自体少なく、至るところに動物が付けたらしき傷跡が残っている。

「おいでおいで」

カトレアが手招きしながらこちらを見る。

どう見ても人間扱いされていない。

「ほら、ね？」

両手を大きく広げながら僕が飛び込んでいくのを待つてゐる彼女を見て、僕は小さく溜息を吐く。

僕は彼女のペットになつたつもりなるつもりもないし、甘えさせてほしいと考えるほど子供でもない。

「 首輪を付けてほしいのかしら？」

でも、よく考えたらまだ年齢的には幼い子供だし、たまには甘えてくなつてしまつることも無きにしもあらずだし、女性の誘いを断るのは紳士的に許されないし、むしろここは大人になつて彼女に付き合つてあげるのも貴族の務めだよね。

「うふふ、どうしたのかしら？」

彼女の右手にちらりと見えた黒い物体を見て、僕は抵抗する事なく彼女の腕の中にすっぽりと納まつた。

そして彼女は僕を抱き上げて膝の上に乗せる。

まだ十三歳なのに彼女の身体は女性的に順調に成長している。

これで病氣さえなれば貴族の男連中に大人気ではないだろうか。

ヴァリエールの領地からすら出れない病弱な身体の彼女に僕は同情する。

「 同情なんていらないわよ？ お友達もたくさんいるし、家族にだつて愛されているし、暮らしだつて豊かだし。それに私つて同情さ

れるの好きじゃないのよね。同情つて上から田線の言葉でしょ？

私は下に落ちているつもりはないわ

「あいたつ

「

額に衝撃を受けて痛みに瞳を閉じる。

でこびん、優しい力で放つただろ？それはなかなか痛みを感じた。

「それと云つたでしょ？ 貴方と云ふと身体の調子もなんだかいいのよ」

「なにそのアニマルセラピー？」

「アニマルセラピー？」

「動物と触れ合つ事で癒しがどつたりこつたりなのですよ」

頭を撫でられながら思ひ。

「どう考へても癒す立場なのは僕ではなく、カトレアだらう。

「それは素敵ね。お友達と一緒にいるだけで、仲良くなっているだけで体調が良くなるなんて」

部屋で寛ぐ動物達を見て彼女は笑う。

僕は頭を撫でられながら気持ち良さそう田を細め、されるがままになっていた。

「アリアはいろんな事を知つていいのね？」

「あまり外出が許されていないので、読書ばかりしているからですにゃー。所謂『頭でつかち』ってやつです」

「魔法も得意なんでしょう？」

「あんな疲れるもの嫌ですよ。僕は頭脳労働派なのです。あ、でも労働 자체嫌なので将来は一日中寝ているグータラ人間がいいです」

「私みたいに？」

「病気になるのは勘弁ですけどね」

僕がそう言うと彼女は笑う。

「ハツキリ言うのね？ 気を遣つたりしないの？」

彼女の表情は僕からは見えない。

けれど悲しい表情ではない事は話し方からわかる。

たぶん彼女は純粋に、好奇心から尋ねているだけなのだ。

怒っている訳でも、悲しんでいる訳でもない、いつも通り優しい笑顔で微笑んでいるのだろう。

「僕は人間を平等に自分がしたいように扱うですからね。王様だろうが、貴族だろうが、平民だろうが、病人だろうが、怪我人だろうが、たとえ悪魔だろうが、僕は自分勝手に振り回します」

たまに振り回されるけど。

「うふふ、そうね。その方がいいわ。私は対等に平等に扱ってくれる方が嬉しいもの」

「僕は対等より下に扱うですけどね」

昔、『病人だから、身体障害者だから優しくしなさい。差別しちゃダメよ?』なんて言われた事があるが、僕はそれ自体が差別だと思う。

人間平等でいきましょうぜ。

「そうね。私もそっちの方が気が楽だわ」

頭をぽんぽんと叩かれる。

「ありがとね」

そして何故かお礼を言つてきた。

心の底からお礼を言われるなんてこの世界でははじめてかもしない。

心の底から怒られるのは生まれてから何度も経験したが、こんな風に『ありがとうございます』なんて言われたのは前の世界でもなかなかない。

「か、勘違いしないでよねっ！ 別にあんたの為なんかじゃないんだから！ 別に嬉しくなんてないんだからあーー！」

「あらあら、ルイズみたいね」

無表情でツンテしながら棒読みすると、カトーレアは含みのある笑顔で微笑んだ。

「顔がりんごみたいに真っ赤よ？ それに口元が一やつ二やつ三やつ」

無表情で

「耳まで真っ赤か」

と、とにかく、カトーレアは笑った。

「これでこの話は終わり！」

「やうね、そしあしましょい」

「ほんと咳ばらいして話を強制終了させやる。

この世界には勝てない人間が多過ぎやる。

「あ、そうそう。首輪の色は何色がいいかしら？ やっぱり瞳と同じ赤？ 私の髪と同じ桃色？ それとも貴方のお腹の中のよつに黒？」

「誰が腹黒か」

「やうね。貴方は黒より真っ黒で、貴方のお腹の中と同じくりこ黒い色の首輪なんて見付からないわよね」

「誰もそんなこと言つてな　ああ、喉はらめええーーー。」

喉をぐりぐりと撫でられ、僕は快感に身をよじる。

「ほらほら、何色がいいのかしら？」

「首輪なんか、あつ、うにゃ、ああつ、喉は、喉は

カトレアのテクニックは以前よりも成長していた。

僕は悶えながら抵抗するが、彼女はそれをものともせず、僕の喉を優しく撫で続ける。

ヘブン状態っ！！！

あれから帰還したルイズが止めてくれるまで延々と快楽地獄に囚われていた。

喉を撫でるだけで呂律が回らなくなるほど気持ち良くするとかゴッド（ブリミルではない）フィンガー過ぎる。

「……あんた大丈夫なの？」

ベッドで寝込む僕を心配そうに見つめる幼女に僕は返事できない。

「たぶん今声を出したらみさへう語（だつたかな？）みたいな言葉でしか話せないだろ。」

「いつも自由で元気なあんたをそこまで追い詰めるなんて、……やっぱりちいねえさまつたら最強ねー！」

ルイズは誇らしそうに笑う。

「こいつもの仕返しか知らないがとても偉そうだ。」

「これに懲りたらあんたもこれからは人をからかったり振り回すのをやめなさいー！」

それは関係ないと思つ。

「もし今度私に何かしたらちいねえさまにお願いして今みたいになるようにしてもら　　あいたつ」

調子に乗るな。

僕はルイズの額に力いっぱいで「じぶんをした。

「告げ口したらルイズ

「じぶん

息を飲む幼女。

僕の普段の行いの悪さからどんな仕返しをするのかに怯え緊張しているようだ。

「　のお父様の髪の毛を根絶やにしてあげよ!」

「やめたげてえ……お父様めちゃくちゃ『気に』してるから……たまに鏡を見ながら髪の毛を弄つて溜息吐いてるからあつ……」

「…………」

「『めん』

「私も……」

お互い悲しげな表情で見つめ合ひ。

確かに心配しなくてもあと11年は白髪が増えるだけで髪の毛も健在なはずだが、やはり年老いた男は髪の毛関係で多大な悩みを抱えるものなのか。

そういうえばウチのお父様もまだ若いのに同じような事してたつ。

勝ち誇る幼女の悲痛な叫びを聞いて、僕達はお互い他の人は巻き込まない事を決めた。

ちなみにこの時のルイズの叫びは屋敷内に大きく響いていて、公爵にも聞こえたらしく、彼は普段の威厳のある顔付きが霞むほど、めちゃくちゃ涙目だったそうだ。

第八話 カトレア動物園（後書き）

喉を優しく『撫で』続けるが、喉を優しく『投げ』続けるという優しさの力ケラもない、SMを越えた鬼畜プレイになつていたのを七煙兎様の指摘により、修正させていただきました。

たぶん投稿してから1万アクセスぐらいありました、31日のアクセス数は普段の倍でしたが、皆さんお気づきだったでしょうか？気付いていて、しかもそういうプレイなのかと納得していたアブノーマルな変態さんはいたでしょうか？

とりあえず一応言つておくと狂愛の作品のカトレアさんは喉を千切つて投げる趣味はありません。

期待していた方はすいません。

第九話 魔法少女ルイズ バクハ

「トリック・オア・トリーート。お菓子をくれなきゃ犯しちゃうぞ、でござります」

「えつ、突然何ですか？」

「何故か言わなきやいけないよつた氣がします」

突然変態的な台詞を言い出したメイドは無視する事にする。

ルイズは魔法が使えない。

爆発、爆発、爆発、爆発。

何度もやっても爆発、何をやっても爆発するボンバーガールだ。

今日もドッカン、ドッカン、庭に生えた草を根こそぎ焼失させて
いる。

僕とメイドはそんな彼女の魔法を見学しているのだが、これがまた面白い。

治癒を使おうとしたら爆発つてびつ考へてもトドメだ。

「何よ？ 言いたい事があるなら言へなさいよ」

半泣きの表情で僕を睨む幼女。

最年少スクウェアたる僕が未だにどんな魔法も成功しない彼女を笑いに来たとでも考えているのだろう。

まあ、あまり間違つてないが。

「あれじやないですか？ ルイズ虚無つてるんじやないですか？」

「はあ？ 何馬鹿な事言つてんのよ。私が始祖ブリミルと同じ虚無な訳ないでしょ？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

僕のせつかくの助言を全く相手にしないルイズ。

まだ子供なんだから素直に『私が虚無？ そつか、そうなのね！ わあい』とか喜んべよクソガキ。

「そうね。もし私が虚無だつたらお母様の寝室を魔法でめちゃくちやにしてもいいわよ？ それに付け加えてエレオノール姉様の眼鏡を粉々にしてもいいわね。それで叱られてもあんたのそいにはしないわ」

ふふんと笑うクソガキ。

たぶん11年後に死ぬ程後悔する。

ドカーン。

ルイズが杖を振りながら呪文を唱えるとまた小さな爆発が起こる。

「ほり、見なさい？ 虚無だと思い込んでやつてみてもコモン・マジックすら成功しないじゃない」

「失敗魔法を誇られても……」

「う、うるさいわねえ！」

ふふんと誇らしげなルイズに言い返すと、彼女は図星をつかれて真っ赤になる。

あの真っ白な本とアホリエッタが旅費の足しに売つてもいいと言つた国宝の指輪で覚醒していないのに成功するはずがない。

「とりあえずあれだよ。11年後までに虚無にならなければ僕の負けでいいよ」

「なんか中途半端な期間ね？まあ、いいけど。もし無理だつたらあんたがさつき言つた事をやるのよ？」

「うん、約束ね」

「はいはい」

僕とルイズはお互いに笑い合つた。

僕は彼女が泣きながら一人に怒られるのを想像しながら、彼女は逆に僕が二人に叱られるのを想像しながら、一人共純粋に、とは言えない邪まな笑顔で微笑みあつた。

「さて、その話は終わり。とりあえずルイズはこれからその失敗魔法を活かす事でもしたら？」

「はあ？」

ルイズは僕の言葉を聞いて怪訝な表情をする。

何言ってんのこいつ、なんて今に言つてきやうだ。

「何言つてんのこいつ

言われてしまった。

「魔法が全部爆発するなら爆発を利用すればいいんだよ！ つまり人類は滅亡する！！」

「な、なんだつてー！ って最後のは全く関係ないじゃない！ ！ 何やらせんのよー！」

「何やつてんのよー！」

「へんなぞこつー..」

ガヤー、ガヤー、つるさいルイズを程よくからかいながら僕はルイズの爆発魔法練習方法を考える。

そして良い方法を思い付いた。

「ヴァリエール家メイド部隊＆フランシア集合！..！」

風の魔法を使って屋敷内に声を響き渡らせると、最初から傍にいたフランシア以外の一流メイドの皆さんも仕事で離れられない人達以外全員庭に集合してくれた。

「全員一列に並べーつ！…」

「えつえつ？」

ルイズは突然の状況に着いていけないみたいでキヨロキヨロと拳動不審だが、メイド部隊+の皆様は状況を理解していないのにも関わらずに直ぐに行動を開始し、あつという間に一列に並んだ。

「そのまま待機！」

僕がそう言いつと彼女達は微動だにせず、そのままその場に直立し続ける。

「よし、ルイズ。鍊金だ！一列に並んだメイド達の心臓目掛けて順番に鍊金を掛けていけ！馬鹿にしてきた使用人や変態をぶち殺せるチャンスですよ！」

「　　「ええーっー？」　　」

ルイズとメイド達から驚きの声があがつた。

フランシアは無表情だが、ヴァリエール家のメイド達は顔面蒼白だ。

あの爆発の威力は使用人なら全員知っているし、そもそも平民にとって魔法とは恐怖の対象だ。

いくら失敗魔法といえども恐がるなというのは無理な話だ。

張本人のルイズはいきなりメイド達を殺せと言われ、杖を落とし

てしまつた。

流石に真っ直ぐ育つた五歳児にこんな発言をしたら怯えるのは当然か。

「あ、ああああんた何言つてんのよー」

ルイズの言葉にヴァリエールメイド軍団は大きく何度も頷く。

集まられたと思つたらいきなり魔法のためにされるなんて初体験だ
わづ。

「練習にピッタリじゃない?」

メイド達は必死に首を横に振る。

ルイズは吠えた。

その言葉に感動して感涙するメイド達まで存在している。

「あんた達、もういいからせつせと持ち場に戻りなさい。こいつは私がなんとかしておくから」

ルイズがそう言つとメイド達はフランシアを除き、全員逃げるよう泣きながら去つていった。

「普通に、練習、させて、頂戴！」

はあはあと荒い呼吸を整えながらルイズが僕を睨む。

「興奮しているのですか？ 性的な意味で」

「そんな訳ないでしょっ！！」

そして彼女は杖を拾いあげて僕に向けた。

「ああいう悪ふざけは許さないからねっ！？」

「はいはーい

僕が返事をするとルイズは疲れたように杖を下ろしてその場に座り込んだ。

パチパチパチ。

手の平を何度も合わせたような乾いた音がルイズの失敗魔法で荒れ果てた庭に響く。

「お見事です、お嬢様。これで使用人達は陰口など叩かず、ルイズ様を慕うようになるでしょう」

「えつ？」

フランシアが僕に向かつて拍手をしていったようだ。

彼女は僕を褒め讃えながら微笑み、ルイズはそれを聞いてハッとしていた。

そして照れたような表情で僕を見る。

僕はルイズに見つめられながら笑顔で答えた。

「えっ、何の話？ 僕はフランシアを殺してもうひとつで練習用の的を用意しただけなんだけど」

二人から笑顔が消えた。

信じられないものを見たかのようになってしまった。

「そうよね。ここが私を気遣うなんて有り得ないわ」

「肯定です。私の考え方過ぎな勘違いでした」

「いつこの一人は仲良しな気がする。

ルイズは彼女がロリコンの変態だと忘れているのだろうか。

「まあ、そんな事は置いておいて。魔法の練習しようぜー。僕は冷やかすだけでしないけど」

「冷やかしはいらないわよー。」

「まあまあまあ。爆発魔法を有意義に使うにはやー」

「失敗魔法なんて意味ないじゃない。私はお母様やお姉様達みたいにちゃんとした魔法が使いたいのよー。」

お父様が入っていないのが可哀相だ。

ルイズは呆れたような顔で僕を見る。

「ふむふむ、ルイズは爆発をコントロールする自信がないと？ ち
ゃんとした魔法じゃないから操る自信がないと？ 誰も使えない魔
法だから教えてくれる人もいないし、できる自信がないと？」

僕の言葉を聞いていく内にルイズはみるみると真っ赤になつてい
ぐ。

「はあ？ そんな訳ないじゃない！ いいわ。こんなぐらいすぐこ
コントロールできるようにしてやるんだからっ！」

「はいはいそうですね。天才ルイズ様なら簡単ですよねー」

「むかつくぅ！ 絶対やり遂げてみせるんだからー！ 見てなさいよ
つ！？」

いっつして見事に載せられたルイズは爆発魔法のコントロールを覚
えたのだつた。

キレやすい若者は扱いやすい。

第九話 魔法少女ルイズ バクハ（後書き）

ハロウインですね。日本で過ごしていると仮付いた時には終わっている、なんて事もよくあります。

お気に入り登録や感想、お気に入りコーナー登録ありがとうございます。

あれですよね。自分が好きな小説の作者さんが自分の小説を読んでいる、なんて知った瞬間には大歓喜でござります。

お気に入り登録してある一つ！なんて一人でニヤニヤした経験がある方も他にもいるのではないでしょうか。

まあ、皆さんそうだと思いますが、読み専門の人でも登録してくれてたりしたの発見したら嬉しいんですけどね！

まあ、そんな話でした。

最後に一言。

Trick or Treat! (「^{かんそう}馳走くれなきや 悪戯するぞ
！」)

冗談です。それでは。

第十話 烈風式訓練法

少し予定に狂いはあつたが、ヴァリエール家に来た当初の目的通り、僕は烈風のカリンこと公爵夫人カリーヌに鍛えられていた。

毎朝早朝からトレーニング、休憩ついでにご飯を食べた後は昼までメイジには体力も必要だと言われ、走る、走る、走る、走る。

昼からは実際に魔法の使い方を学ぶ訓練。実際に使つたり、戦い方を頭に叩き込まれたり。

そしてティータイムを挟んだ後には実戦形式という名のメイジメ。烈風のカリンとガチバトル。

此処は何処の軍隊ですか。僕は軍隊になる為に育てられているんですか。

僕は毎日ボロボロになるまで扱かれ、けれど全く筋肉がつかないところ悲しい運命に立ち向かいながら頑張っている。

ちなみにカリーヌは同じ訓練を密度を増やしてやつているが息いつ乱さない。たぶん いや、絶対に化け物だ。

「今日はコレにて終了します」

そんな辛く長い一日が今日も終わつた。

カリーヌは一言告げて去つていいく。

いきなりスクウェア・スペルが使えるというチートな能力を持っているはずなのに全く勝つ事ができない。

てゆーか何故僕は訓練なんてしているのだろう。

疲れる事は嫌いだ。魔法も疲れるから将来的にも極力使わないようにならなければいけない。原作とか戦争とか他人任せのつもりでいる。

それなのに神様にチート貰つたけど努力はするぜ、的なオリ主以上に扱かれているのは何故なんだ。

「……樂してズルして他人を犠牲にして、のんびりと生きていきたい」

「何、最悪な独り言を言つてんのよ」

僕の独り言に返事が返ってきた。

幼女、ルイズ。虚無の扱い手。

ピンク頭のルイズが芝生に倒れ込んでいる僕を上から見下ろしていた。

「やあ、裏切りピンク。何か用ですか？」

「誰が裏切りピンクよっ！？」

今日もルイズは元気に突っ込む（性的な意味ではない）。

「あんたが死んでないか確認しに来てやつたのよ！ 勘違いしないでよ？ し、し心配なんてしてないんだからね！？」

そしてシンデレラ。

家族や田上の人以外には素直に接する事ができないとか残念な子だな。

友達ができそうにない。

僕は自分の事を棚にあげてルイズに同情する。

「……何よその眼」

「友達できそうにないなあつて同情してる眼」

「あんたに言われたくないわよッ！」

ふんすかぴー。ルイズは怒った。失礼な（僕程ではない）事を言いながら僕の身体をおもいつきり蹴った。

骨、折れました。

「……」めさん

「…………」

「悪かったわよ

「…………」

「「めんなさい」

「…………」

ベッドに寝転ぶ僕にルイズは何度も何度も頭を下げる。

けれど僕はそんなルイズを睨み付けるだけで何も言わない。

あの後、僕はメイドさんに運ばれて、ヴァリエール家専属の水メイジに治療されて完治した。

まさか始めての大きな怪我がルイズからの攻撃とは思わなかつた。

カリーヌに四肢をもがれるか、威張りん坊な貴族に不意打ちされるか、原作に巻き込まれて敵にやられるか、戦争に無理矢理参加させられて敵国に攻撃されるか、そのどれかだと思っていたが、幼女に骨折られました。

僕の身体が貧弱なのか、ルイズの筋力が異常なのか。

ちなみに実は別に全く怒っていないのだが、いじける女の子って可愛いよね、なんて理由で放置している。

「わ、私だつてお母様にたくさん叱られたのよ?」

半泣きで、でも意地を張りながら、僕から視線を反らしつつ、ルイズは言った。

お姫様以外のはじめての同世代の友達（僕にとつては玩具）に嫌われた、なんて幼女らしい事でも思つていいのだろう。

それが全く検討違いの勘違いとも知らずに落ち込んでいるのだろう。

僕はそんな君の様子を見ているのがすっごく楽しいですにゃー。

「……ねえつてば

粘るルイズ。拗ねるフリをする僕。

烈風さんの訓練で疲れた心身が癒されていく感覚がする。

人に意地悪な事をしていると、僕は非常に楽しい気持ちになる。

ふふふ、でもそろそろ飽きたし許してあげよつかな。

「「めんなさい」

「……いいよ」

「ほ、ほんとー?」

僕が許すと、彼女は意地を張るのも忘れて嬉しそうに微笑んだ。

「うふ、お願いを聞いてくれたらね」

「お願い？」

僕の言葉を聞いてルイズは少し嫌そうな顔をする。

どうせ普段の僕を考えて、どうせ悪いお願いでもしてくるのだろうとか考えているのだろう。

実は何も考えていないんだけどね。

セヒ、どうしようか。

悪戯とかは別にやりたい気分でもないし、公爵家の三女の権力を利用してやりたい事なんてないし、あ、そうだ。

「今度お姫様に会わせてよー。」

「……アンに?」

ルイズは何を企んでいるのだろうか、と僕を疑いながら見つめる。

フランシアを爆殺して、と悩んだが僕はこちらを選択した。

純粋に、温室で育つた白百合を真っ黒（腹黒）に改造なんてのもいいし、普通に騙しやすそうだから騙して何かをやるのもいい。

アホリエッタなら良い玩具になる。

僕は今からワクワクしていた。

「いいわ。私からアンに言つておいてあげる。アンがお願ひすれば王宮にいる人達も断りきれないでしょ」
「うし

心の中でガツッポーズ。

新しい玩具が手に入るぞー。

そして運が良ければ若い頃のマザリーーも弄り回せるかもしねない。

「た・だ・し！ 絶対に粗相がなにようになー！」

「僕はタダシじゃなくてアリアですよ？」

「名前じゃないわよ！ てゆーかタダシなんて変な名前の人間いる訳ないでしょ」

日本に山ほどいます。

「ルイズ、人の名前を変だなんて失礼だよ？ タダシさんに謝りなさい」

「『』『』ごめんなさい つて、だからタダシって誰よーー！」

「タダシさんはね、みんなの心の中にいる妖精さんなんですよ。悪い事をしようと罪悪感という名前の痛みを与え、悪事を未然に防いだりしているんです。そんな素晴らしい心の妖精さんなんです」

「やうだつたのね……。」めんねこ、私ったら

「もうろん嘘だけどね」

「し、信じ、別に私最初から信じてなかつたんだからー。」

何故ルイズはこんなに扱いやすいのでしょうか。

僕は心の中で少し呆れる。

まあ、幼女だから仕方ないのだが、純粋ゆえに人を信じやすく騙されやすい。

僕にとっては面白いからいいけど、将来困るだらうなあ。俺俺詐欺とか引っ掛かりそう。

「絶対なんだからね！」

きやんきやん吠えるルイズを放置して、僕はベッドに潜り眠る態勢になる。

「おやすみなさい」

「聞きたよーー！」

とりあえずアホリエッタに会うのが楽しみです。

今から期待に胸が膨らむ。気のせいか物理的にも膨らみやうな気がする。

「ちよっと、聞かなれこよー。」

ヤダ。

田を睇じて、ライズの喚き声を予想しながらだんだんと意識が遠退いていく。

良い夢見れますよ!うし。

第十一話 手紙のやり取り

『アリアへ

元気ですか？

ヴァリエール家でイジメられたりしていませんか？
なんて一応言つてみるけど、お兄ちゃんはアリアがヴァリエール

家人達をイジメていなか心配です。

ちゃんと手加減していますか？

昔メイドが号泣しながら辞職した時みたいな鬼畜な行為はしていませんか？

ヴァリエール家みたいな大貴族に喧嘩を売つて、ルチアーノ家が取り潰しになるような事は勘弁してください。

お兄ちゃんは普通に家を継ぎたいです。

クイントより』

『愛しのダーリンへ

私もダーリンに会えなくて寂しいけど、ダーリンの写真で自分を慰めながら今日も元気に過ごしています。

イジメなんてとんでもない。

ヴァリエール家人達はとても良い人達です。

でもダーリンみたいに鞭で調教したりしてくれるのは不満です。
身体が疼いてします。

今度の休暇には是非私を辱めてくださいまし。

それとメイドの件ですが、あれはあのメイドが私のお気に入りのぬいぐるみを間違えて処分してしまったからです。

私は悪くない！ 私は悪くない！

貴方の奴隸より』

『アリアへ

あんな手紙を学院に送るとはどういうつもりですか？

普通に教室で読んでいたせいでクラスメート達に見られて、誤解され、ドン引きされてしましました。

しかも最近女子生徒の視線が冷たいです。

お兄ちゃん泣きそうってゆうか、毎日枕を濡らしています。何が言いたいかわかりますね？

お前次に会った時は容赦しないからな！

それとメイドの件はどう考えてもやり過ぎでした。

全裸で屋敷の庭に立たせるとか何を考えて生きてるんですか。

クインントよつ

『おこころまく

ありあまだ』そこだからよくわかんなーい。

『あつあよつ

『アリアへ

ぶち殺すぞ。

クイントよつ

『お兄様へ

冗談ですよ。

ちょっとしたハルケギニアンジョークです。

お兄様の御学友の方達には個別で誤解を解く種の手紙を送つておきました。

この手紙がお兄様の元へ届く頃にはお兄様の誤解も解けているは

ずです。

安心して学業に励んでください。
メイドの件は僕は悪くないです。
むしろあれぐらいで済ませてやつた事に感謝してほしうぐりこで
す。

本来ならオークの鬼の巣に入れて、
と
をして
アリアより

アリアへ
を
に
ぐらいたかつたです。

お前次ふざけたらマジぶつ殺すからな。
誤解の件はどうやら解けたみたいです。
でも少し質問があります。

何故学友達は揃いも揃つて泣きながら謝つてきたのですか？
あのエレオノールすら泣かせるなんて一体どんな手紙を送ったの
ですか？

お兄ちゃんはアリアが怖いです。
それとメイドの話はもうやめましょう。
いえ、お願ひだから聞かせないでください。
実際にやつていなくても怖いです。

クイントよつ』

『ヘタなお兄様へ
了解いたしました。
誤解が解けたみたいで良かつたです。
どんな手紙を送つたか、ですか？
人間誰でも知られたくない秘密があるというものです。
それを書いて、もしこの事をバラされたくなかったらクイントに

は逆らうな、と少しお茶目な冗談を書いただけです。

お兄様は何も気にせず奴隸（一重線で消されている）ではなく御学友をこき使つて（一重線で消されている）ではなく御学友と仲良く楽しく過ごしてくださいませ。

メイドの件了承しました。

アリアより

『アリアへ

何故調べたのか、どうやつて調べたのかは聞きます。

だからその秘密は全部頭の中からも消滅させてください。

最近クラスメートどじろか先生達まで怯えていて、誰も話し掛けてくれません。

自分から話し掛けたら泣きながら机嫌をとりつと頑張ってきます。

こんな恐怖政治の暴君生活はもう嫌です。

一刻も早く戻してください。

それと人のクラスメートを奴隸扱いしたり、しき使うとか書いたりはやめてください。

それに消した後がまる見えで逆に怖いです。

普通の学院生活を返してください。

クインントよつ』

『我儘なお兄様へ

御学友の件了承いたしました。

どうせなら教員も、と思ったのですが、それもお兄様には余計なお世話だったようですね。

全て解決しておきます。

あと奴隸の件ですが、あれはまだ五才ゆえに知識不足で間違えた

だけです。

勘違いなさらいでください。

お兄様が楽しい学院生活を送れる事を祈ります。

『アリアより』

『アリアへ

ありがとうございました。

少し違和感はあります、少しずつ元の学院生活が戻ってきているようです。本来ならお礼は言つ必要などないのでしょうが、一応伝えておきます。

それとお兄ちゃんの為に行動してくれた事自体は嬉しいです。それもあります。

あと知識不足とか言つていますが、アリアの本性や知識量は知っているので、嘘だとバレバレです。

嘘をつくならもつとまともな嘘をつきましょう。
楽しい学院生活を送ってほしいなら何もしないでください。

『クイントより』

『お兄ちゃんへ
妊娠しました。』

『アリアより』

『アリアへ

相手は誰ですか?
何処のクソ野郎ですか?
騙されてるに決まっています。
今すぐ相手を教えなさい。

すぐに処刑してやる。

パパより

『お父様へ

あれ？ お父様に届いてしまったみたいですね。

クイントお兄様です。

アリアより』

『アリアへ

父上から貴様がアリアをたぶらやしたのか、今すぐ実家に戻つて
来いという手紙がきました。

どういう事ですか、何をしたんですか？

とりあえずお前も今すぐ実家に帰つてこい。

クイントよつ』

『アリアへ

先週の家族会議ではやつてくれましたね。
もう少しでお兄ちゃんは切り刻まれてグリフオーンの餌にされると
ころでした。

今でも殴られた頬が痛いです。
何故遅れて来やがつたのですか。

クイントよつ』

『お兄様へ

親父にも打たれた事ないのに（笑）
ぶ

アリアより』

『アリアへ

おい、なんかムカつくからやめ。

クイントよつ』

『お兄様へ

一度も打ぶった(笑)

アリアより』

『アリアへ

殺す。絶対殺す。

クイントよつ』

『お父様へ

アリアはお兄様に殺されるみたいです。

今までお世話になりました。

お父様やお母様の事大好きでした。

アリアより』

『アリアへ

父上に告げ口はズルイと思います。

おかげでお兄ちゃんは今ベッドの上に一週間います。

クイントよつ』

『お兄様へ

アリアへ

お大事に。

アリアより』

『アリアへ
他に言う事ありませんか?
クイントより』

『お兄様へ
始祖ブリミルの使い魔ガンドールヴはエルフの女性だったそうです。

アリアより』

『アリアへ
そんな事は聞いてな（一重線で消した後）えつ、本当ですか?
謝罪を求める気持ちもありますが、それよりそっちの方が気になります。

クイントより』

『お兄様へ
ごめんなさい。

アリアより』

『アリアへ
許します！だからその話を詳しくー

クイントより』

『お兄様へ

最近暑いですね。

アリアより

アリアへ

ガンドール、詳しく述べ

クイントより

お兄様へ

ググれカス。

アリアより

アリアへ

兄にカスとか殺すぞ。

クイントより

お兄様へ

反省が足りないようなのでお父様に報告させてもうります。

アリアより

可愛いアリアちゃんへ

海より深く、山より高く反省しております。

だから父上に報告だけは勘弁してください。

ハルケギニアよりも広い心を持つアリア様の慈悲に期待しています。

お兄ちゃんまだ死にたくないです。

クイントより』

『アリアへ

今、エレオノールに頼んで代筆してもらっています。
お兄ちゃんは腕すら満足に使えない状態です。
もうこれ以上は勘弁してください。

クイントより』

『お兄様へ

大丈夫です。

お兄様のように面白い玩具（一重線で消してある）素敵なお兄の死
を、僕が望んでいるはずがありません。
お父様にはちゃんと反省していると伝えておきます。

アリアより』

「ふふつ」

「お嬢様、何を笑つておられるのですか？」

「ちよつとお兄様からの手紙を見ていたのですよ」

「なるほど、そういう事でしたか

「お兄様つて本当に面白こよな」

「肯定です。ちなみに奥様曰く若い頃の旦那様にそっくりなようですね」

「ふーん」

そんなお話を

第十一話 手紙のやり取り（後書き）

トリステインはベルギー、ベルマニアがドイツ、ガリアがフランス、アルビオンがイギリスでしたつけ？

とりあえずハルケギニアはエルフだろうと翼人だろうと話せる西人含めてみんなフランス語に似た言葉で統一されているイメージ。

ちなみにうわざさん家のルチアーノはトリステイン貴族なのにイタリア系です。由来はご存知ラツキー・ルチアーノです。でもルチアーノ伯爵家には一切関係ありません。

アリアは楽器メーカー。クイントはラテン語を調べてたからだつたかな。アルベルトはある有名なアインシュタイン。シルビアは自動車で半分正解、Janne Da Arcの曲名でパーソナリティ。フランスも同じくラテン語です。

基本的にその場の思い付きで名前作るのでクイントとかアルベルトとかフランスは正直名前がすぐに出できません。今回クイントくんの名前を出す時も第一話見返して書きました。

アリア・サマー、オニー・サマー、オトウ・サマー、オカア・サマー、メイ・ド・サンとかにしておけば良かったかも。

第十一話 アンアンマジアンアン

「僕と契約して腹黒少女になつてよー。」

「えつ」

「アン、こいつの言葉は8割無視していくや」

「はちわり?」

「ほとんどって事!」

「なるほど」

酷いなあ。今から育てておいたらトリステインがトリスターニアの街を歩けば必ず裏切り者にぶつかるなんてアホな国になる事はないのに。

アンリエッタは6才らしいバカな げふんげふん、相応の知識を持つただの子供だった。貴族の箱入り娘との違いは服装の豪華さぐらいの何のオーラもない普通の子供だった。

髪も地味だし。

頭の良さといい、風格といい、派手さといい、見た目の美しさといい、ルイズの方がどう見てもお姫様っぽい。

虚無の血はヴァリエールに濃く流れちゃったみたいだから、始祖ブリミルの血を引くっていう王家として重要な要素も薄いし、貴族連中が裏切りたくなる気持ちもよくわかる。

だって王様が死んだらマリアンヌは食っちや寝税金で贅沢生活で仕事しないし、アンリエッタは多国の王子にふおりんらぶで王族の事を何一つ理解していない母親そつくりのダメ子さんだし、どう考へてもトリステインとか崩壊寸前じゃねえですか。

てゆーかマザリーーーになかったら確実に滅んでいたよ。

てゆーかアンリエッタはウェールズの気持ちを全く理解せず見た目だけそつくりの偽物の死体に着いていくし、それが終わったらすぐにはイトに乗り換えるし、どう考へても王族的にアウトじゃないだろうか。

「アンアンマジアンアン！」

「アンアン？」

「アン、無視でいいわ。下手に関わったらアンが汚れてしまうわよ？」

ルイズが王宮に来てからひど過ぎる。いつもまめつと寝てぐるぐるに。

はつ、まさかアンリエッタに…？

「！」の泥棒猫！ ルイズは私のモノよ…！」

「えつ？」

「ちょ、な、ななな何言つてんのよ、あんた…！」

「嘘だよ、バーカ！… 『はつ』」

嘘発言を聞いた瞬間、ルイズのブラジリアン・キックが炸裂する。
ま、魔法使えよ。最近 格闘少女ルイズ マジカ！？ になっち
やつてる気がしたりしなかつたりするんですけど。

これでガンドールヴの力もゲットしてゼロが使い魔になつたら、
格闘も武器術も魔法（虚無）も使いこなせる最強メイジになれるね。

「やつたねルイズちゃん！ 家族が増えるよ…！」

「やめて！ てゆーかいきなり何の話よ…？」

今日もキレの良いシッコミありがとうございます。

僕達のそんなやり取りを見て、アンリエッタは目を丸くする。

「あ、姫様 じゃなくて、アン、『めんね』

そんな様子を見てルイズは僕から視線を反らし、アンリエッタに告げる。

「ううん、ずいぶん仲がいいのね。もしかしてお母さまが言つて
いたコリ? つてやつかしさ?」

「ち、ちちちちち違つわよ! てゆーか『イツ男よ!』

5才児に何教えてんだマリアンヌ。

「そりなの? ならもしかして『イビト?』

「もつと違つわよ!』

もつとつてなんですか、もつとつて。僕が女でルイズと百合の方
が有り得るという事なのでしょうか。

えつ、去勢されるの?

僕はルイズから10歩、間を取るように下がる。

「ちょ、なんで距離を取るのよ!』

「まさか君がフランシアと同じ趣味だったとは……』

予想外にも程がある。サイトと恋愛関係にならないじゃないか、
なれないじゃないですか。主人を使い魔の憧れるよつた信頼関係が
アウトじゃにゃーですか。

「ち、ちち違つわよ! 私はストレートよ! 普通に男の子が好き
だわ!』

慌てて近付きながら誤解（？）を解こうとするルイズ。けれど僕は近付かれるとフランシアの時と同じようにルイズが近付いた分だけ後ろに下がる。

「大丈夫です。信じていますよ。だからそれ以上近付かないでください」

「信じてる態度じゃないじゃない！」

「これがお母さまが言つていらしたシュラバってヤツかしら？」

何教えてんだマリアンヌ第一段。

あと、修羅場は違います。

「ちよ、アン！ それだと私が浮氣したみたいじゃない！」

「うわあ～」

「それは つて、姫様にそんなの教えられないわーー！」

「えー」

ぎやーぎやー喚くルイズと好奇心旺盛な子供のアホリエッタを置いて僕はお姫様の部屋から出る。

ルイズが一緒にいると思わずルイズを弄つてしまふし、今の純粹培養アンリエッタに僕が関わるとルイズが言つたように汚れ口ワードを使いこなす淫乱お姫様になつてしまつから今回はこれぐらにしておこう。からかいがいが全然ないし。

原作ぐらいになつてから、女王様になつてからぐらいに弄りに行
い。

あ、お母様とは違つて女王様プレイとかはしないんだからね！

あれ？ アイツマザリーーじゃね？ 未来の鳥の骨じゃね？ 超
ウケるんですけどー（笑）

王宮を探索するところ供つぱい（下供らじい）遊び（もちろん
悪戯もつこでに）をしていたら、若き日のマザリーーが前方から歩
いてくるのを発見した。

顔を見た瞬間吹き出しちゃったのは仕方ないと思つ。

彼は今時期教皇とか尊になつてゐる人物である。その為下級貴族
なんかは媚びを売ろうとして必死乙である。

上級貴族とかは他国の人間だから警戒しているみたいですね。

ちなみにどうせ今の王様が崩御（死ぬつて事）したら教皇選抜的
なヤツやるから帰つて来いつて言われてもトリステインに残つて、
トリステインの為に自分を犠牲に頑張り、そして王家の為、国の為
を優先して貴族を蔑ろにする+他国の人間が事実上トリステインの
事を支配してゐみたいな感じになつて、トリステイン乗つ取りを考

えてるとか疑われて、今媚び売ってる下級貴族に加えてトリスティン国民にすら嫌われるんだけどね！」

「「ほん、私の顔に何かついていますかな？」

そんなマザリーーーさんはずっと自分を見てくる人間、しかも何故か笑つている子供である僕を不思議に思い、声を掛けってきた。

「目と鼻と口と眉毛と髪と」

「いえ、そういう事ではありますせん」

わかつてるよ。「冗談だよ。ハルケギニアンジョークだよ。のつペ
りぱつなんてハルケギニアにいないよ！」

「失礼ですが、貴方は？」

「あら、失礼。私ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・
ヴァリエールでございますわ、マザリーーー殿（こゝ・釘宮）」

僕が108ぐらいあるかもしれない特技の一つ声真似を使いながら優雅に一礼すると、彼は苦笑を浮かべる。

「ほう、ヴァリエール嬢でしたか。確かに声は同じですが、確か彼女はピンク色の髪でしたがの？」

「ええ、まあ、嘘ですかね」

マザリーーーは僕の嘘発言を聞くとぽかーんと間抜けな表情で僕を見る。

知つてゐるなら最初から言つておいてよ。

「ルチアーノ伯爵家のアリアです。よろしくお願ひします、マザリ一殿」

「あ、そういう私めには大切な用事があつたのでした。これで失礼」

「待ちやがれですよ」

僕の名前を聞いた途端に態度が急変したマザリー一はそのまま僕から逃げていこうとするが、そのまま逃がすはずがなく腕を掴んで引き止める。

「何故名前を聞いた途端に……失礼じやないですか？」

僕が睨むとマザリー一は露骨に嫌な顔をする。うわあ、田を付けられたとか思つてるのだろうか。

「うわあ、田を付けられた」

思つてんのかい。えつ、何、僕つて王宮まで名を轟かせる有名人？

「お願いしますから、勘弁してください。お金なら出しますからー。」

ヤンキーに絡まれた中坊か！ そして僕は肩がぶつかつたとかいちゃもんつけてきたヤンキーか！

「で、では仕事があるので失礼します！」

僕が呆れながら手を離すと、マザリーはその隙を付いて僕に重い袋を手渡して去つていった。

たたたんたんたんたーん。

アリアはマザリーを倒した。

経験値300と金貨100エキューを手に入れた。何処か虚しい気持ちを手に入れた。

後日、マザリーが5歳の子供にカツアゲされた話をトリスティン王にして、見事に笑われたが、その子供の名前を聞くと笑うのをやめたとかなんとか。

第十話 アンアンマジアンアン（後書き）

トリストイン王とかいつ死ぬのだろう。適当に10歳の時でいいか。6年間王不在ぐらいでいい。

狂愛は調べるのが面倒だった。

第十二話 Would you lend me your underwear

どうも、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。貴族の家の三女やつてます。最近の日課はアリアに虐められたウチの使用人を慰めてあげる事です。今日もたぶん何かしらやらいかしているでしょーつ。

「ぐすつ……、うわーん！…」

噂をすれば影がさす。私が屋敷の中を歩いていると、田の前に顔を鼻水だらけにしながら号泣しているメイドがいた。

確か彼女はヴァリエール家の使用人になつたばかりだ。名前はいちいち覚えていない。たぶん先輩達にアリア関係の面倒事でも押し付けられたのだろう。

群れの中で一番弱いものを囮に、わざと狼の前に差し出して逃げるという手段はとても賢いと思つ。犠牲を最小限に抑えるのは生き残る為に必要な事だ。

ヴァリエール家のメイドは狡賢い草食動物なようです。サバンナに放り込まれても生き残れるでしょう。

さて、私はそんな犠牲にされた、狼に襲われた哀れな新人メイドをそのまま放置して行く事ができるほど囮太い性格はしていない。だからいつものようにハンカチを差し出しながら声を掛けた。

「どうしたのよ。アリアに何かされたの？」

「…………つ、ぐすん」

新人メイドはハンカチを受け取ると、鼻水塗れの顔を拭い、涙を止めようと顔に力を入れ、瞼をぎゅっと閉じる。

うん、流石に他人が鼻水をしたハンカチは洗つても使いたくないからあのハンカチはこのメイドにあげよ。

「実は、わ、わたし、……ぐすっ、お洗濯係の一人に任命、ひつくなれて、それで、アリア様の部屋に洗濯……ぐすん、……ものを取りに行つたんです。そ、そしたら……「つ、アリア様が」

メイドが涙ながらに話してくれた事を要約するといつだ。

アリアの部屋に洗濯物を取りに行つた。そしたらちょうどアリアが部屋にいた。だからアリアに洗濯物の場所を聞いた。そして教えてもらつてそれを受け取つて帰ろうとした。すると下着がない事に気付いた。だから洗う予定の下着の場所を尋ねた。そしたらアリアが豹変し、新人メイドはついつきまでお仕置きとして泥塗れの靴を舐めさせられていた。

「流石アリアね。サディスク過ぎるわ。むしろアリア過ぎるわ」

「つ、ぐすん……」

私は話し終えてまた泣き出したメイドを気遣いながらアリアの鬼畜っぷりにドン引きした。

まだ年若いメイドにどんだけマニアックなプレイをさせたんのよー

「とりあえずね、アリアの洗濯物とかはルチアーノ家のメイドのフランシアにやらせればいいわ。てゆうか貴方（ヴァリエール家のメイド）はやらないでいいのよ。身の回りの世話は食事とか以外あの子がやるから」

「……ぐすつ、はい」

「それに基本的にアリアに関しては上手く関わらないようにしなさい。呼び止められたら用事があるとか言って。まあ、そこいら辺は先輩に聞きなさい」

「わかりました……ひつぐ、ありがとうございます！」

「ほら、仕事に戻りなさい」

「はい、……ぐすつ」

私の言葉を聞くと、メイドはふらふらと走り去っていった。

何が原因かはわからないが、今回は先輩メイド達の新人メイドへのアリア関係の教員不足だったようだ。知らなかつた故にやらなくていい事をやるうとしてしまい、結果逆鱗に触れた。

あの新人はこれに懲りてもつむやみやたらにアリアに近付かないだろう。

「しかし、下着ねえ……。下着、下着、 下着！？」

私は唐突に気付いてしまった。

アリアの下着。普段は見えない男性と女性で全く別の形であるアレ。

アリアは、彼は一体どちらの下着を付けているのだろうか。性別的に考えれば男性物だが、容姿や普段の服装、それにあの子の母親の趣味を考えると女性物なのだろうか。

気になる。乙女として気にしてはいけないモノはあるがすぐ気になる。

てゆーか下品ではあるが、私は実際にアリアが男である証拠を見た事がない。

もしかしたら男勝りな女の子、もしくは男に憧れる女の子、それか心は男の子な病気なのではないだろうか。

他にもフランシアを警戒して男と言つていたり、悪い虫が付かないように男と言つていたり、そして嘘つきのアリアの事だから性別すらも冗談半分で偽つてる可能性がある。

「だつてそうよね。普通に考えればあんなに可愛い子が男の子なはずがないじゃない！ きっと何か事情がある女の子なんだわ！ ハツ、もしかして女の子が好きな女の子だから男の子だとつて気を惹こうとしてるのもしれないわ。いえ、きっとそうなのよ！ そして普段から何かと私に意地悪してくるのも私に構つてほしいから、私と少しでも話してみたいからに違いないわ！ そ、そそそそうだったのね、アリア！？」

耳まで真っ赤に染めながら私は叫ぶ。

気付いた。気付いてしまった。きっとアリアは私にいけない感情を抱いてしまっているんだわ。

ああ、私ってなんて罪作りな女なのでしょう。同性すらも惚れさせてしまうなんて。

でもダメよ、ルイズ。私には子爵様という口約束だけど親が決めた許婚がいるのよー??

ああ、私って本当にいけない娘……。

「どうしたのですか、ルイズ? 一人で真っ赤な顔でくねくねして、何かの遊びかしら?」

「ち、ちいねえさま!-?」

私は自分の考えに長く没頭していたらしい。背後からちいねえさまが話し掛けてくるまで、近付いてくるまで全く気付いていなかつた。少し恥ずかしい。

「あ、あのね、ちいねえさま! えっと……、そういう、アリアの下着つてどちらなのでしょうねー?」

わ、私つてば何言ひてるのよ~?

さつきまでの妄想を語る訳にはいかず、咄嗟に私が出した話題はなんとも変態的な話題だった。

……どうしよう。ちいねえさまにアリアの下着を考えて妄想して

た変態とか思われるかもしれない。

私はちいねえさまに嫌われてしまった自分を想像して少し落ち込む。

「うふふ、ルイズ。わからないのなら確かめればいいのよ

」
「……確かめる？」

「ええ。あ、私はそろそろ行くわね」

「あ、はい」

ちいねえさまはいつも通りの素敵な笑顔で私にアドバイスすると、すぐにはいってしまった。

確かめる うん、確かに気になつたら確かめてみるのもありね。ううん、ちいねえさまがおっしゃったんだから、それがきっと当然なんだわ。

私は勝手に解釈して勝手に納得する。

けれどどうやって確かめればいいのだろう。普通に聞けばおそらく私も延々と靴を舐めさせられてしまうはずだ。

私にはそんな趣味はない。だから少し慎重にならなくては。

「あ、そうよ！ その手があつたわ！」

私は突然閃いた。この手ならアリアに怪しまれる事なく下着の種

類が調べられるわ。

やつと決まつたら早速行かなきや。

「ねえ、アリア。どうも私の下着がまだ洗濯中で使えるのが一つもないのよ」

早速アリアの部屋に向かつた私はアリアがいる事を確認すると、挨拶もそこそこに本題に入る。

「だからあなたの下着貸してくれない？」

「えつ？」

言つた。私は言つてやつた。これなら座しまれたりなんかしないはずだ。

アリアは突然の発言に困惑していようつだが、怪しんでいる様子はない。

流石私ね。策士過ぎるわ、ルイズ。

「……まあ、いいですか？」

そしてアリアは部屋の中にある箪笥を漁り始めた。

「はい、どうぞ」

それからしばらくして、アリアが取り出した下着は女性物だった。しかも少し、その、え、えつちな感じの。

う、うわあ……、この娘、こんなにえろい白の下着付けてるんだ？ い、今もあの服の下に？ もしかして真っ赤なとか、真っ黒のとかもあるのかしら？ いえ、やっぱり白オンリーかしら？

私は「ぐく」と喉を鳴らす。

「あ、そういうえば違う算算に下着があつたの思い出したわ！ あ、あはは、あはは、じゃ、じゃあね！」

そして恥ずかしくなつた私は唐突に別れを告げ、走り去つてしまつた。

あんなにセクシーなのを5歳のくせに付けてるなんて流石エロアリアだわ！ ペ坦んこなのに妙な色氣があるのはそのせいだつたのね！ わ、私もお母様に新しいの買つてもらわなきや！ 一応想つてくれているアリアにもあんな子供っぽい下着じゃ失礼だし！

私はこれから田標というか、買い物予定というか、とりあえず何かを考えながらお母様の元へ直行した。

「おや、お嬢様？ 私の下着が何故かゴミ箱に入っているのですが。言つて下されば下着どころか中身まで見せて差し上げますのに。真っ赤な顔で私の下着をオカズに必死にシロシロなさつていたのですか？」

「ぶつ飛ばすですよ淫乱メイド。ルイズが下着を借りに来たから君がわざわざ僕の箪笥に仕込んでおいたそれをルイズに渡そうとしただけです。まあ、ルイズは借りずに真っ赤な顔で走り去つていってしまったので捨てましたけど」

「あら、そうでしたか。残念ですわ」

アリアの下着の真相は闇の中。

第十三話 Would you lend me your underwear

明日用に予約投稿しようとしたけど面倒だから直接投稿。

第十四話 つわが一羽（一）

母が来た。お母様が来た。サテイステイック星出身である事が疑いようもない母親がやつて來た。各所で恐れられている悪魔がやつて來た。いろんな噂がある伯爵夫人がやつてきた。僕は転生してルチアーノ家に生まれたから性格は似ているはずがないのに、よくそつくりと言われる女王様がやつて來た。

さつき使用人室を覗いたら長年勤めているらしい使用人達が辞表を書こうとしていた。厨房を覗いたら『今すぐ最高級の食材を揃えろ！ 機嫌を損ねたら死ぬぞ！』とコック長が騒いでいた。ヴァリエル公爵の部屋に行つたら虚無の曜日なのに仕事に行つてくると出ていつてしまった。

僕のお母様は一体何をやらかして生きてきたのだろう。何故こんなに恐れられているのに嫌われている訳ではないのだろう。不思議だ。

「あんたそれ自分に言つてるの？」

隣にいるルイズに僕の考えを伝えたら鼻で笑われた。

「失礼だよルイズ。僕はお母様レベルの事はまだやつてないよ

「まだ、ねえ？」

あ、そういう意味ではない。「これからやるという意味ではない。勘違いやめてほしいので、いざこますよ。

「アリアの彼氏になる人は大変よね。そう考えるとルチアーノ伯爵は勇者だわ。母親と娘がこんななんて」

「……僕は男には興味ないです」

「そ、そそそうね！ そつだつたわね！ じ、[冗談よ、冗談！ そんなんに不機嫌そうな顔しないでよ」

誰だつて薔薇男呼ばわりされたら不機嫌面になるよ。それにこんなのは呼ばわりもひどいと思うです。

僕は何故か真っ赤なルイズをジトーっと睨み付ける。

「あらあらあら、仲が良いのね。まるで昔の私とアルベルトのようだわ」

そんな僕達の様子を、感性が狂つたお母様が勘違いしながら話し掛けてきた。

この人が言う恋人関係、しかも伯爵夫婦とかどう考えてもサドマゾ、S&M（奴隸《スレイヴ＆マスター》）でしょう。お母様がキヨドる姿なんて想像できないからルイズが僕の旦那様？ もしそんな可能性があるとしても普通逆じゃないだろうか。

僕はルイズの鳶色の瞳に自分の紅色の瞳を合わせる。

「なななな、なな何よ！？」

「落ち着けよ、ルイズ（こゝ・田野）」

「……誰の声よ」

拗ねた感じのサイトの物真似をしてみるとルイズはようやく落ち着いてくれた。まだ出会う前だけ絆が繋がっているのだろうか。運命的な感じで。

「ルイズの事を大切に想う（巨乳好きのくせにルイズLOVEだし）、強くて（ガンダールヴだし）、変態で（エロ犬だし）、浮氣性で（よく目移りするし）、ちょっと変わった人間（異世界から召喚されるし）？」

「『ルイズの事を大切に想う（数少ない友達）、強くて（最年少スクウェア）、変態で（えつちな言葉を使う）、浮氣性で（ルイズ以外もいじめる）、ちょっと変わった人間（性別を偽っている。」「女装してる）？』ですか？　あんたの事聞いてるんじゃないくて、さつきの声の事を聞いたのよ！　そりやあ大切に想ってるとかは嬉しいけど……」

何言つてるのでしょうか、この娘。

僕は溜息を吐きながらお手上げとばかりに両手を上げる。

「はあ、久しぶりに会った母親よりも恋人といちゃついてるなんてひどい子ね。お母さんなんだか寂しいわ。……この泥棒猫！　アリアは私のモノよ！」

「アリアと同じ事言つてる……」

「ウチの母親がごめんなさい」

突然豹変したお母様と僕を交互に見て感心するルイズに、僕はやる瀬ない気持ちで頭を下げる。

僕はいつもこんな感じなのか。僕と同じように自由に振る舞っている、自分の感情のままに生きているお母様を見て、僕はなんだか恥ずかしい気持ちになった。

「それにしてもミス・シルビアはアリアそつくりですね。まるで姉妹みたいですね」

「あら、シルビアでいいのよ？ ビューゼアリアもヴァリエール家の年上の人間なんて呼び捨てでしょ？ あ、もししくはお母様とか！」

「お、お義母様だなんてっ！！！」

ルイズに若いと遠回しに褒められて喜ぶお母様。そしてそんなお母様の言葉に何故か赤面してくねくねし出すルイズ。

最近この子、様子がおかしいです。フランシア曰く、よく場所を選ばず一人でくねくねしてゐるらしい。

てゆーかお母様。僕は公爵は公爵、カリーヌは心の中以外では先生と敬意を払つた呼び方をしてるですよ。エレオノールとカトレアは呼び捨てですけど。

「……ねえ、ルイズちゃんビューゼア？」

「？」

「知らにゃーですけど、鞭は勘弁してあげてほしいです」

何処からともなく鞭を取り出すお母様を見てドン引きしながらも流石に止める僕。

原作前にルイズがドMに調教されてしまっていたとか勘弁してほしいです。てゆーかこんな人に似ているって言われる僕って一体何なんだろう。最近自重しているのに。

「あら、残念。ルイズちゃん可愛いから楽しめそうだったのに」

流石、本物の女王様にSMの女王様プレイで調教したドS。女の子でも関係なく、子供だろうと容赦なく、大貴族の娘だろうと躊躇なく、息子の友達だろうと例外なくいけるのですか。

見た目はアルビノで儂い白のイメージなのにドス黒いですねお母様。その白い肌のお腹の中は真っ黒ですか。その白い髪の奥から生まれる思考は真っ黒ですか。その真っ赤な瞳は今までお母様に酷い目に遭わされた人の血の涙の色ですか。

……なんだか自分に言葉が光速で跳ね返されてきているよくな気がするがきっと気のせいだ。そうだ、そうに違いない。

「ハツ、私つたら……。すいませんお義母様、ついおかしな事を想像しています」

正気に戻つたらしいルイズが何故かちらちらと僕を何度も見ながら申し訳なさそうにお母様に頭を下げる。

「Jの母親にしてこの息子ありとか思つてるんだろうなあ。イヤだ

なあ。

「いいのよ。女の子にほんとうの時があるもの」

ねえですよ。

「ね、アリア？」

僕に振らないでください。僕は男の子だからわかりません。女の子どうしてもわかる気がしません。どちらどうしてもわかりたくありません。

僕は視線を合わせようとしてくるお母様からルイズへ視線を反らし、無理矢理頷かせようとするとお母様の無言の威圧感を回避した。

「や、やっぱりそうなのね……」

すると視線の移動先であるルイズは拳動不審な感じでまた僕とお母様を交互に見つめながら、うんうんと何度も一人で頷いていた。

「いや、ルイズ。お母様の話は絶対に嘘ですよ。女の子にはそういう時があるなんて言つてますが見た事がないです」

「あ、私が頷いてるのはそっちの話じゃないわよ？」

どっちの話ですか。

僕の首が肩に触れ、僕の表情は疑問を抱く表情に変わっていく。

「べ、別に気にしなくていいわ。隠してるみたいだし！　いや、そ

「うじやなくて、その……私は何も知らないから…」

意味がわからない。やっぱり何処か壊れてしまったのだろうか。

僕は意見を求めようと、年長者だから何かしら対象方法を知らないかとお母様の方を見る。

しかしお母様もわからないのか答えば苦笑でしか返ってこなかつた。

「まあ、どうでもいいですね」

「ええ、どうでもいいいわね」

お母様と一緒に何度も頷く。

「やつぱつそつくりだわ。流石似た者母娘おや」

この人に似てるって言われるのは見た目なら美人って事で嬉しいけど、性格が似てるは正直嫌すぎる。

僕はお母様と比べたら小悪です。お母様みたいな性悪ではありますせん。

「あ、お義母様！ そろそろ食事の時間ですし、案内しますわ

「あー、やつね。じゃあ、お願ひしちゃおつかしく」

僕はささやかな願いを渴望しながら一日で仲良くなつた一人が姉妹のように手を繋いで、僕をほって歩いて行くのを見送った。

ちなみにその夜食べたご飯は文句が付けようのない御馳走だった。

それと僕とお母様には関係ないが、ヴァリエール家で雇われていた平民が10人ほど『2倍の辛さはもう味わいたくない』と言い残して辞めていった。

貴族と同じ、調味料が使われたご飯でも食べたのでしょうか？平民にはヴァリエール家の、それも豪華さを重視した味付けは濃過ぎたのですかね。嫌なら食べなきゃいいだけなのに。

第十四話　「わざわざ」（後書き）

遂にかなりの差を付けて新しく書き始めたばかりの『バカ』に負けたうわざでした。

でも書きやすいから（文章とか気を使ってないし）、好きな小説の作者さんがお気に入り登録してくれているのを偶然見付けたから、狂愛はこの小説も書き続けていきたいです。

さて、何故か順調にルイズフラグが建っているような、ルイズルートに突き進んでいるような気がします。サイト×ルイズが好きな狂愛としてはあるえ？ って感じです。弄りやすいからとルイズを出し過ぎたのが原因でしょうか。

ワルド頑張れ！ サイト頑張れ！

誰か「わざわざ」に適当なヒロインを作つて譲渡するのが一番確実だろつか。

第十五話 幼女性愛騎士

「ある朝、アリア・ド・ルチアーノが不安な夢からふと覚めてみると、ベッドの中で自分が一匹の、とてもなく大きな白兎に変わってしまっているのに気がついた」

「おはようござります、ザムザ様」

「誰がグレゴール・ザムザですか」

まだぼやけている眼を右手で擦りながらベッドの上で上体を上げる。

朝一から部屋に勝手に侵入していく、主人のボケにボケで返して突っ込ませると、彼女は本当に使用人だらうか。せめてボケにはツッコミをお願いしたい。

「ザム　お嬢様。心配なさらなくともお嬢様は白兎ではなく、白兎の様な人間なので、ご安心してください」

「最初から心配しないですよ。てゆーかうきぎのような人間って安心できるのですか?」

ベッドから立ち上がりながら溜息を吐く。

てゆーかなんでもザムザ様つて言いかけてるんですか。

僕は朝から幾つも不満が出てくるが、彼女には言つても無駄なので言わない。

けれど不満なのはやっぱり不満なので、顔を洗つてタオルで拭いた後、僕は彼女を睨みつけた。

でも彼女は気にしない。ただ自分の仕事を遂行し続ける。

「お嬢様、こちらへ着てください。服を

「変な事しようとしたらクビであるから」

「既まつりました」

先に命令してからフランシアに服を替えさせる。

命令には基本的に逆らわない事にこの前気が付いた。だから最近は彼女に怯える事なく楽しく愉快に痛快に過ごさせてもらっている。

「ふふふ、フランシアも命令されたら何もできないのですね」

「肯定です。命令できない寝てる間にほつぺにキスとかはしてますけどね」

「えつ」

「あと、すやすやと眠るお嬢様の一部を舐めたりとか

「何してんですか」の変態メイドおおお……！」

フランシアの胸倉を掴みながらおもいつきり揺する。

えつ、なんなの？ 命令がなかつたらやりたい放題なんですか？
主人に手を出すんですか？

「またに飼い犬に手を噛まれるですね。野良犬に噛まれたと思つて
忘れるといいですよ」

「忘れられる訳ないですよ！――」この――」この――」この――」

不敵に笑うフランシアの脣にローキックを何度もくらわせる。け
れど彼女は表情を変える事も、苦痛に膝をつく事もしない。

クビクビクビクビクビクビクビクビクビクビクビクビクビ
――

僕は心の中で何度も叫ぶ。

「……半分冗談ですよ」

けれど彼女の告げた言葉で、僕のマグマが噴火したような怒りは
鎮火した。

なんだ冗談か。

「――って、えつ？ もう半分は？ そしてその半分に該当する部
分は？」

「ほつぺにキスです。生娘じゃあるまいしそれぐらいでしょ？
さあ、お嬢様。今日も可愛らしくなりましたよ。まあ、私としては着飾つていらない自然なお嬢様の方が、裸のお嬢様の方が可愛いと
思いますけど」

「よくねえですよー。僕はからかうのはいいけどからかわれたりする側はダメなんです！ トゥーかジセイに紛れて何言つてんですか！？」

「林檎みたいに真っ赤なお嬢様も素敵ですわ」

「うるさいー！」

「ヨイツが貴族、もしくはそれ以上の王族に生まれなかつたのは、このハルケギニアにとって不幸中の幸いだと思う。」

もし権力か武力なんか持たせたら平民のメイドでハーレム作ったり、幼女を誘拐してきたり碌な事をしないだろう。

ブリーリッシュさんのファインプレイだ。

「それよりお嬢様、本田の『予定』なのですが」

「それよりつてなんですかバカ。とりあえず寝てる間の接触一切禁止！」

「ちつ、畏まりました」

「……舌打ちしやがったですよ」

親の顔が見てみたまつてホント、こついう時に言つんですよね。どんな育て方をしたらこんなに貴族を嘗めた平民が育つのですか。

いや、やつぱり見たくない。正確には逢いたくない。そもそもヨイ

「そつくるつの変態レズ野郎だったら僕は終わる。

「てゆーか今日は虚無の曜日ですよね？ 何故予定なんか？ それを教えてから舌を噛み切って死ね」

「訓練などはおやすみですが、ルイズ様[ド・ワルド子爵の息子さんが会いに来るそうです。お嬢様、そんなに激しいティープキスをご所望ですか？」

「なるほど、それは面白そうかも。自分の舌を噛み切れって言つてんですよ」

「はい、ですから予定の確認を。流石はお嬢様。サティストの鏡ですわ」

「うそ、ならそのワルドさまーを見に行ひ。黙れカス」

まるで姉妹のように仲の良い語り合ひをしながら、僕達は夕食の席に向かった。

「決闘だつ！」

「……ワルド様」

「はあ、帰りやがれですよロココン」

「お嬢様、ふあとでいります」

勇ましく吠えるジヤン・ジャック・フランシス・ド・ワルド、そんなワルドを見て頬を染めるルイズ・フランソーズ・ル・プラン・ド・ラ・ヴァリエール、溜息を吐きながら呆れるアリア・マヌエル・アダリッシュ・ド・ルチアーノ、アリアを無責任に棒読みで応援するフランシア。

朝、『ご飯を食べてルイズと（で）遊んで、昼、『ご飯食べてルイズと（で）遊んでもたらワルドが来て、何故か、いつの間にか決闘をする事になつっていた。

「どうじつこうなつた……」

「初対面のワルド様に出会つた瞬間笑いながら『ワルドさまあ WWWWW』とか言つたのが原因ではないでしょうか？ もしくは婚約者とのMプレイに興じるお嬢様に腹を立てたとか」

なんて器の小さい、心が狭い男なのだろう。流石は無理矢理結婚しようとしたら拒否されて、キレてルイズを殺そうとした鬱子爵の若い頃。更に心が狭いのですね。

あとSMEプレイはやつません。

「ワルド様つ、何故決闘だなんて……」

「止めないでくれ、僕のルイズ。たとえ相手が女の子だろつといや、女の子だからこそ負ける訳にはいかないんだ！」

「ワルド様……」

男の子ですけどね。

格好を付けるワルドを見てルイズは頬を朱色に染める。そしてそんなルイズを見てワルドは自慢げに僕に視線を向ける。

いや、別に羨ましくないですよ。

「いいか、えつと」「

「アリアお嬢様です」

「ミス・アリア。杖を落とすか負けを認めるか、どちらかを選んだ方が負けた。単純でいいだろ?」

子供相手に必死乙です。

「僕は風のトライアングルだ。ギブアップするなら今の内だよ?」

「参りましたー。フランシア、カトレアの動物と遊びに行こうです

「なつー!?」

僕がわざと杖を落とし負けを認めるべ、ワルドの「めかみからブチリッ」と嫌な音が聞こえる。

「待ちたまえ! まだ決闘は始まつていないぞ!?」

「子供相手に必死ですねワルド様（こわく…釘宮）」

「ち、ちが、ルイズ、僕は君の為に！」

「えつ、えつ？ 私は何も

「そんなワルド様なんて格好悪いですわ（こゝ・釘宮）」

ルイズの声を真似しながら批判すると、ワルドは面白こよつい慌て出した。

ルイズは自分が喋っていないのにワルドが自分の名前を呼びながら慌てる様子を見てはてな顔だ。

てゆーかルイズは僕がルイズの声で話したのに気付いてないです
ね。他人に聞こえる声と自分が話す声は違うからでしょうか。

「くつ、仕方ない。決闘は中止だ！」　10年後にも決着をつけよう。

「あ、ああ、はい……」

10年後に弄つてくださいって意味ですか。わかりました。

しかしあれですね。確かに今のワルドは面白くない。

まだ裏切つてないし、髪生えてないし、普通のイケメンっぽい。

ただしロコノードアリーナだかど。

「覚えていろよ！　この借りは必ず返す！..！」

「ワルド様？（〇△▽・釘宮）」

「い、いや、何でもないよ」

「……？　ワルド様どうかなさったんですか？」

「一体この人何しに来たんだろう。」

いきなり決闘を申し込んできたワルドは結局決闘を未来に先延ばしにした後、何もせずに帰つていった。

第十五話 幼女性愛騎士（後書き）

そういうえばアリアの前世の名前って何でしょうね。
愛姫とかでしょ
うか。

第十六話 お別れの日

ヴァリエール家に来てから、カリーヌから魔法教育を受けるようになつてから、時間が過ぎるのは早いものでもう一年が経つた。

そしてつい先日、カリーヌに『貴方にはもう教える事はあります。いえ、ただ身体を鍛えただけですが、まあ、とにかくもう終わりです。それにもうヴァリエール家の使用人も限界ですから』と言われた。

そんな訳で今日ルチアーノ家に帰る次第です。

「変態メイドー、荷物まとめ終わつたですよー？」

「一部否定の肯定です。私はメイドで荷物はまとめ終わりましたが、変態ではありません。それと荷物は既に馬車に積み終わりました」

「どんな考え方をすればお前が変態じゃなくなるのかわからないですよ」

1年間使用した客室とも今日でお別れ。ここは僕の第一の私室のようなんだ。また是非来たいような気もしない事もないような気がする。

「それじゃあ、僕はルイズにお別れでも言つてくるですよ。公爵夫妻やカトレア、使用人にはもうしたですし」

「その際に公爵の浮氣を捏造、使用人の部屋にあるベッド全てに画鋲を仕掛けるという悪戯を残していったのには恐れ入りました。ま

さか恩を仇で返されるとは

「あれが僕流のお礼だよ。カトレアには何かしたら大変な事になりそうだったから何もしなかつたけど」

「性格が捩曲がり過ぎて大事故になつていますね」 それならお母様の性格はハルケギニア滅亡レベルですね。いや、あの人なら滅ぼそうとすれば本当に滅ぼせそういう怖いですけど。

「んじゃ、いつてきまーす。部屋の掃除は来た時よりも美しくでょろしくねー」

ルイズの部屋の前まで来た僕は、まず普段はしないノックを数回した。けれど彼女から返事が帰つてくる事は無い。

「居留守ですか？ わたしと帰りたいのでドアを開けてほしいんですけど」

ガチャガチャガチャ。

何度回してもドアノブは開かない。続けてノックをしてみても何の反応も返つてこない。

「そんなにお別れが寂しいのですか？」

「……違つわよ

やつと反応が返ってきた。

しかしながらこのしんみりとした空気は。僕はシリアルなんて大嫌いなんんですけど、コミカルにいきたいんですけど。

「なうやつをと出でてくるですよ。てゆーか今生の別れでもあるまいのに句を悲しむ事があるのですか」

「へぬせこひるせこひるせこー。」

『うるせいやこつるちやこつるひやいー。』と返すのは、流石に空気を読まな過ぎですかね。

まあ、アホしか友達いないし寂しい気持ちは仕方ないのかな。一年間一緒にいたんだし。

僕はドアにもたれ掛かりながら溜息を吐いた。

「ルイズ、会おうと思えばいつでも会えるし、会いたくなくても魔法学院に入る頃には嫌でも顔を合わせるんだよー？ てゆーか僕はシリアルが得意じゃないからこつものような感じにしまじょうぜい！」

木の板できたドアの向こうからほんの少し嗚咽が聞こえる。

なんだこれは、なんなんだこれは。僕は自分の思い通りに人を振り回すのが好きなのだ。こんな風に相手の顔色を伺いながら、相手に気を遣いながら話しかけるなんて僕じゃない！

「わかつた……5秒」「えるです。その間にドアを開けなければ吹き飛ばしちゃいます」

僕は杖を取り出して構える。

相手のペースに合わせるのなんともつやめだ。どう考へてもアリアじゃない。の生き方に反する。

「「」おー……、よおーんー……、321、デストロイーーー！」

ドッカーン。

風の魔法でドアを吹き飛ばし、声も掛けずに、反応も待たずに中に入る。

うんうん、これが僕だ。

中に入るとルイズは身体を毛布で覆い隠しながら泣いていた。

いつもなら文句の一つや二つ言つてくるのに、何も言つてこなかつた。

「はあ、なんか調子狂うですよ

今のルイズは面白くない。僕が玩具にしていたルイズじゃない。こんなただの子供は僕の友達ではない。

いつものルイズちゃんんじゃない。

僕は毛布を掴み、おもいつきり引っ張がす。

「なつ、なにすんのよつー?」

何度も擦ったのか、どれだけ泣いたのか、ルイズの瞼は赤く腫れていた。

「……ルイズ

「あやつ

僕はそんなルイズの両手首を掴み、ベッドに押し倒すよつな形で馬乗りになる。

「ひやつ、だつ ちよ、そんなどこ舐めないで、よつー!」

そして赤く腫れたその瞼を、動物がするよつにペロペロと舐める。眼球」と舌で犯していく。

「ダメよつ、そういうのはつ……大人になつてから、じゃなことつー!」

「……何勘違いしてんですか」

「えつ」

フランシアじゅあるまいし、僕は口っこ「ンなんかじゃないしこんな子供に手を出したりしないよ。

手首を離し、馬乗りの体制からルイズの頬を横に伸ばす。

「ふにゅ　」

「おお、これ気持ちいい」

「あぶ、あばばつ……ひにゅ、つづく」

「のびーるのびーる」

「ひやめにゃひやこほーー」

そのまま何度も引つ張つていると、ルイズは僕の両肩を押して、突き飛ばしそうとする。

けれど僕の手がルイズの頬から離れただけで、僕と彼女の距離は変わらない。

「あんたね！？ そういう雰囲気じゃなかつたでしょ！？ 今のは普通き、きときときキスしたりとかそういう感じでしうが！！」

「うわわこどもよマセガキ！」

「あだつーー？」

「うだうだとうるさいルイズの脳天にチヨップをくわえると、彼女は額を押さえながら睨んできた。

「何すんのよーー？」

「そつちの方がルイズらしいよ

「えつ」

僕は満面の笑みで微笑んだ。

「これだ。このうるさいきやんきやんうるさいに発情期のうるさい雌犬みたいなうるさい女がルイズだ。」

しゅんとしているルイズなんてルイズじゃない。何よりも普通の女の子なルイズなんて僕がつまらない。

「ルイズ？」

「……何よ」

「またいつでも会えるんだから泣く必要はないですよ」

「……わかってるわよ」

ルイズは頬を膨らませながらぷいっと視線を反らす。可愛いつもりなのだろうかこの雌豚は。

「ねえ、アリアア？」

「なんですか？」

「キス、してくれない？」

「……はあ？」

いきなり何を言い出すのだろうか。もしかしたら発情期になってしまったのだろうか。

いや、人間は年中発情期か。なら仕方がない。

僕は一人で勝手に納得した。

「ん……」

僕がそんな事をしている間に、ルイズは僕の方を向きながら瞳を閉じ、可愛らしく唇を突き出していた。

えっ、なにこれ？ サイトくんは？ いじめられ過ぎて田原めちゃった感じなの？

僕はルイズを見る。頬は朱色に染まり、泣いていた為か睫毛がキラキラと輝いている。そして何も言わずに僕を待っている。

据え膳食わぬは男の恥か。

僕は諦めてルイズと重なり合つた。少し震えているルイズの身体を抱きしめ、彼女に顔を近付けていった。

「信じらんない！ なんであそこで首を噛むのよ！？」 ムード満天

だつたじゅないー。」

「ルイズがそう思つのならそうなんだろうです」「やー。ルイズの中だけでは。あと首はなんか美味しそうだつたから」

「『美味しそうだつたから』『じゃないわよー。あんた吸血鬼!-?』

「落ち着いて、落ち着いて。ほら、クッキー食べる?」

「もおーーーー。あんたなんかさつやと向處へなりとも行きなセーーーー。」

かよひなら、ヴァリエール家。

第十六話 お別れの日（後書き）

前話の途中からと今回の話に違和感を感じた人。 貴方は鋭いですね。でも触れないでください。

第十七話 再会の日

私、ルイズ・フランソーズ・ド・ラ・ヴァリエールは少し緊張していた。その理由には今日から魔法学院の生徒になるといふ事もあるが、それがメインではない。

アリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノ、ルチアーノ伯爵家の次男で、私が5歳の時に彼は1年間ラ・ヴァリエールの屋敷に住み込みで、私のお母様に魔法を習っていた。

彼は同じ年なのだがその頃からスクウェアクラスのメイジ、所謂天才というやつだ。しかし基本的に何でもでき、けれどやりたい事をやりたい時にしかやらない、そんなヤツだった。

性格は最悪としか言ひようがない。自己中心的で、会話が下品で、平民だろうと貴族だろうと神官だろうと王族だろうと例外なく、躊躇なく、差別なくいじめ、反撃させる隙を「」えない。私もそんなアリアによく振り回されていた。

ちなみに性格は最悪だが見た目はとても可愛らしかった。白い髪と赤い目で白兎のような、少女のような外見の男だった。それに騙されてからかわれた男は何人もいるそうだ。

そんな彼と別れてから10年。いつでも会えるからと別れたアリアは、たつたの一度もヴァリエール家に顔を出す事がなかつた。

「いつでも会えるって言つたくせに……」

私から会いに行く？ 「冗談じゃないわ！ 普通男から来るもので

しょ？まあ、当時の私は思い込みが激しく女の子だと思い込んでいたのだけれどね。

ちなみに今でも少し疑っている。

閑話休題。とにかく今日はその幼なじみのアリアと再会できる日なのだ。彼が嫌でも顔を合わせると言っていた日が今日なのだ。私の緊張の理由の大部分はそれである。

さて、再会したらまずはなんて言つてやろうか。言いたい事はたくさんあるが、とりあえず会いに来なかつた文句からだろうか。

とにかく今から始まる入学式が終わつたら探して見付けて引きずり回してやる！

憎つくりショルプストーのいけ好かないあの女と青い髪の少女タバサ一悶着あつたが、私は無事に入学式を終える事ができた。そして現在、あの性悪幼なじみを捜索中である。

とりあえずあいつはつさきみたいな目立つ姿だ。成長していくもそれなら一目瞭然、私はすぐに見付けられるはず。

「何処にいるのよ……」

そう思っていたのだが、どれだけ探しても見付からない。あの煌めく白い髪を見逃すとは思えないのだが一体どういう事だらうか。

それに私の桃色の髪も目立つからあちら側から来る可能性もあると思ったのだが。

「……まさか逃げたんじゃないでしょうね？」

私は自分が呟いた言葉に納得する。

そうだ。そうに違いない。きっとアリアは私に怒られるのが怖くて逃げ出したのだ。

なら、いくら一人で探しても見付かるはずがない。誰か学院の使用者に聞く事にしよう。

「ちょっとそこのあんた」

私は近くを通り掛かつた珍しい黒髪のメイドを呼び止める。

「はい、なんでしょうか？」

「アリア・ド・ルチアーノの居場所を知らないかしら？ 白髪赤目で白鬼みたいな見た目のヤツなんだけど」

「ああ、ルチアーノ様ですか。の方なら入学式をサボってずっとヴェストリの広場にいたみた」

「そりゃ、ありがとう。もう仕事に戻つていいわ」

私はメイドの返事を聞かずに歩き出した。

いろんな場所を探し回ったから学院のだいたいの地図は頭の中に入っている。ヴェストリの広場は私が搜していたのとは真逆の方向だ。

あの性悪女男は今頃、私から逃げられたと余裕をこいでいるだろう。けれど私はアインの居場所を知る事ができた。

ふふ、首を洗つて待つてなさい！

久しぶりに会つたアリアはまた一段と彼のお母様に似て、美人になっていた。私はヴェストリの広場に近付くと、遠くから白い髪の人間を見付け、それからゆっくりと近付いた。そして振り返つたアリアの姿を見て私は言葉を失つた。

本当に綺麗だ。長い白髪が太陽の光を浴びて、風に揺られて煌めいている。自分と同性ではないなんて全く信じられない。自分と同じ人間だなんて全く信じられない。

妖精の女の子がいたらこんな感じなのではないだろうか。悪戯好きで見目麗しい妖精 アリアにピッタリだわ。

「何か用？」

アリアの言葉を聞いて、私は現実に引き戻される。

「屈辱だわ。私を覚えていないような態度もそりだし、男に見とれてしまうだなんて！」

私はそんな屈辱を唇を噛む事で堪えながらアリアを睨む。

「何か用、ですって？　あんたまさか私の事を忘れているの？」

「もしそうだつたら許さない。あんなに弄んだくせに飽きたら忘れるだなんて、そんなクソビツチになつていたら引っ叩いてやるわ！」

「ヴァリエール家の三女でしょ？　で、なんか用？」

「なんだろうこの違和感。私を見るアリアの瞳がすごく鋭い。私と話すアリアの口調がすごく冷たい。まるで別人と話しているような気分になる。」

私はそんな不安を必死に頭から振り払いながらアリアに凄む。

「はあ？　何、他人行儀な態度とつてんのよ？　あんた　」

「悪いけど用がないならどうか行つてくれない？　目障りだから」

「今、なんて言った？　この人は一体誰？　アリアが私にこんな事を言つはずがない！」

「あ、あんた一体誰よ…？」

ぼやけていく視界でアリアを捉えながら、混乱する頭を必死に整理しながら、私は今にも掴み掛かりそうな勢いで叫ぶ。

違う。勘違いだつたんだわ。確かにアリアに似ているけど別人。きつとそつなんだわ。

必死に自分を欺こうとするが、努力で手に入れた優秀な頭脳はそんな戯言を肯定してはくれない。

「アリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノだけど？」

そして目の前の人間も肯定してはくれなかつた。私はそのまま芝生の上に膝をつく。

「ちつ、お前が動かないから僕が移動するよ。はあ、やれやれ」去つていいくアリアの姿を私は目で追いかける事すらできない。ただその場に崩れ落ちて、そのまま必死に涙を堪えている。

けれどもうだめだ。堪える事なんてできるはずがない。

私の瞳から零が零れ落ちる。

ああ、私の知ってるアリアは死んじやつたのね。

ヴェストリの広場から少し離れた校舎の影。そこで男子の制服を着た女性に見える男子生徒と10年前から容姿が変化していない実年齢不明のメイドがいた。

彼女達は片方は悔しそうな顔で、片方は嬉しそうな顔で、対象的な表情で向かい合っている。

「さて、賭けは私の勝ちですね、お嬢様。約束通り、奥様の要望通り、女子用の制服を着て、女子寮に住んでもらいます。お風呂はアリア時間というものが用意されていますのでその時間にどうぞ」

「僕は性別秀吉か！　あーあ、なんで泣いちゃうですかね。まあ、でも久しぶりに会った幼なじみが冷たくなってたら仕方ないのかな？」

「お嬢様は何と言つか……乙女心の勉強をした方がよろしいかと。私が教えて差し上げましょうか？　もちろん実技で」

「死ね。今すぐ身体中の骨を粉々にへし折つて死ね」

「生きます。あ、イきますではないですからね？」

「死ね。さつさと毒草のフルコースでも食つて死ね」

「何故か機嫌が悪いですね？　もしかしてルイズ様に自分がしてしまった行為が原因ですか？　罪悪感を感じているのですか？」

「それはない」

「ですよー」

第十八話 友達百人できません

あの後『ドッキリ大成功！』と書かれたプラカードを持つていつたら、ルイズに垂直落下式バックブリーカーで頭から落とされて丸一日ベッドの上から降りられなかつた。

そんな日から一週間が経ち、学院での生活にも慣れてきた今田この頃。僕にはルイズと過保護なお父様が悪い虫がつかないように学院にメイドとして送り込んできたフランシアしか話し相手ができるなかつた。

つまり一人も新しい友人はできていない。見事にハブられていた。

しかしそれはお母様や僕の悪評が原因ではない。入学式とルイズにやられた日を休んだせいで、このアルビノの容姿のせいで病弱で憐い高嶺の花的なポジション（失笑）についてしまつっていたのだ。

「なんというぼっち生活。いずれは便所飯ですね。なんかワクワクですです！」

「なに変な事にワクワクしてんのよ。てゆーか私がいるでしょうが」

ちなみにルイズ経由で友達を作るうとしても、性格が悪く、教室を何度も爆発させているルイズにも友達なんてできていない。

フランシア？ あいつの交友関係なんて変態集団に決まっている。絶対に知り合いになりたくない。アレ一人で十分だ。むしろアレもいらない。

そんな訳でルイズと二人。僕等はリア充集団を遠くから眺めながら非リア充を満喫している感じだ。

「……ねえ、アイツらの真下に火薬仕掛けときなさいよ

物騒な事を言い出すルイズ。嫉妬乙としか言えない。

「ルイズも最初は人気者だったのにねー？」

「アイツら私が魔法が得意じゃない事を知った途端離れていったわ！ 爆殺してやろつかしら」

ルイズの爆発魔法は僕に挑発されて練習したせいか、威力も範囲も自由自在だ。その気になれば学院のメイジの大半を一人で虐殺できると思う。この前教師の作ったゴーレムを一力所ずつ粉々にしながら笑っていた時は流石に恐怖した。

一対一で勝てるのは魔法の使える軍人や接近戦に特化したメイジ殺しレベルの傭兵、あとは特殊な戦闘教育を受けたメイジや伝説レベルぐらいだろう。普通のメイジなら『鍊金』一発で終わる。

これで虚無に目覚めたら文字通り最強だろう。格闘技も使えるみたいだし。

「てゆーかアレよ！ 私達は友達が作れないんじゃなくて友達を作らないのよ！ 友達なんか作ったら人間強度が下がるじゃない」

そんな戯言は置いといて、友達を作らないと社交性とかが下がるのほ確実だと思う。

「アリアー！ いつもみたいにいろいろ振り回していつの間にか友達になつてゐみたいな感じの魔法やりなさいよー！」

「そんな魔法使えないですです

「ほら、あそこの薔薇をしゃぶつてゐる薔薇中毒なんて面白そうじゃない？ 弄つてきなさいよ。そして最終的に仲間にすればいいわー！」

ルイズが指差した方向を見ると、薔薇を口に咥えながら話すという器用な事をしているダサいシャツを着た金髪の少年がいた。うん、ギーシュだねアレ。

「ルイズってああいうのが好みなの？ 変わつてゐですね

「アリアの方が実際はおかしい格好だけれどね」

まあ、確かに。マルコヌル辺りのヤツが僕と同じ格好していたら斬首刑もの……いや、一族やその関係者まとめて皆殺しへされてもおかしくないし。

「てゆーかよく考えたらあんたなんで女子の制服着てんのよー!? 再会した時は似合つてなかつたけど男子のだつたじやない！ 似合つてたから、むしろ女の服を着てゐるのが当たり前になつてたから気付かなかつたわ！」

「ルイズが泣いちゃつて賭けに負けたからですよ

「あんたねえ……」

ルイズはあるで、噴火寸前の火山のよつとぶるふると震え出す。

ああ、また怒り出すのだろうか。

「てゆーがあんたのその胸もムカツくのよ！ なんで少し膨らんでる!? なんで私より大き えつ、柔らかい!? 本物! ? なんでアリアに胸があるの! ?」

賭け事関係で怒られるのかと思いつきや、何故かルイズは僕の胸部関係の話で怒り出した。しかも、もぎ取るうとしているのか、物凄い力で僕の胸を掴んでいる。

「メロンパン入れになつてまーす」

「めろんぱんつてビンなパンよ! ? てゆーかこの感触はパンなんかじゃないわ! ちよつと脱ぎなさい! ! !」

「ちよ、ルイ

「ひるねーーー！」

まさかの野外プレイは勘弁です！

僕は服を剥ぎ取ろうとしたルイズに流石に焦り、必死に抵抗しながら、逃げ出そうとするが、何故かルイズの華奢な腕はびくともしなかつた。

「脱ぎなさいよー！」

「あ、落ち着いてー ほのひこひのは

「

「ちょっとだけ！ ちょっとだけだから！ 先っぽだけだから……」

何の先っぽですか！？ てゆーか何処の童貞野郎！？

ルイズの目を見ると、洗脳されたかのようにぐるぐる巻きの渦が見える。ウチのお兄様にでも取り憑かれたのだろうか。もしくはフランシアとか。

「ふ、ルイズ！？」

「……なによ？」

ルイズは声を掛けるとピタリと止まってくれた。けれど手がわきわきと動いていて安心はできない。

「できれば優しくしてください。初めてなので」

顔を反らしながら照れたようにルイズに告げる。しかし反らしてルイズから見えなくなつた僕の顔は、赤くなつてている訳はなく、ニヤニヤと笑つている。

こんな事を言われたらルイズも流石に自分がやつてる事に気付くだろう。

「……わかつたわ。大丈夫、私に全部任せなさい」

なんて、考えていた頃が僕にもありました。

ルイズは止まるどころか、落ち着きながらも確実に僕を食べる事を決めていた。

皿はぐるぐる巻きで、顔は真っ赤、メダパニでもくらったような状態で、おさらば混乱しているのだろう。何か薬でも盛られたのだろうか。

「アリアがいけないのよ。久しぶりに会つたらこんなに綺麗に」

「あー、あー、ごほんっ、うん。神聖な学び舎で、しかも野外でそういう行為は、僕としてはあまり推奨できないと思うのだが、いや、見たいか見たくないかなら是非見たいのだが！」

救いの神現る。いつの間にか近付いていた薔薇男の突然の介入（3Pではない）により、ルイズは正気に戻り、みるみる内に真っ赤に染まつていった。

「なつ、なつ、」「」

「いいんだ！ ミス・ヴァリエール、君の気持ちはよーくわかる。確かに白兎の君はとても美しい。同性の君が惹かれるのも無理はないだろう。けれど、けれどだ！ 野外で、しかも無理矢理というのはいけない事だ！！ しかも婚前にそのような事は

「ち、違う！ 違うのよー アリアの胸を確かめようとしたらい急におかしくなったのよー！」

「それはうりやま ではない。そうだね。女性の胸というのは確かに魔性の魅力を持つ。けれどそれに惑わされて自分を失い、あげくの果てに襲い掛かるのは紳士とは言えない！」

「私は女よー！」

おいてきぼりになつた僕は彼等の言い争い（？）に耳を傾けるのをやめた。それから、ふと胸元に触れて、その匂いを嗅いでみた。何か甘い感じの匂いがする。香水？

「ちよっとアリア！ アリアからもあんたは男だつて説明しなさい！」

「ははは、何をバカな事を言つているんだい？ こんなに可愛い男の子がいたら僕は自分を薔薇だなんて言えなくなるよ」

「あんたは元々薔薇なんかじゃないわよ！」

僕は香水なんて付けないから誰かが付けたのだろうか。学院の寮では一人で着替えているし、そんな機会あつただろうか。

「何、無視してんのよ！？」

胸元の匂いについて考察していた僕は急に肩を掴まれたので、思わず掴んだ相手を見る。そして異変に気付いた。

「う、ごめんなさい……」

「あ、アリアが素直に謝ったですって……？」

何気に失礼な事を言つているルイズだが、僕はそんな事を気にする余裕が無くなってしまつてしている。

ルイズを見ているときゅんきゅんしてしまつている僕がいる。キスしてほしいとか思つてしまつ僕がいる。抱きしめて欲しいなんて

思つてしまつ僕がいる。

どう考へても惚れ薬です。本当にありがとうございました。

たぶんルイズはすぐに戻つたから僕もすぐに正気に戻れるのだろうが、このままでは恥ずかしい事を言つてしまいそうだ。

僕は逃げる為に、薬の効果に抗いながら立ち上がる。

「どうしたのよ？」

「あつ」

「へ？ あんた何その顔？ ついに壊れちゃつた？」

しかしルイズが僕の手を掴み、そのまま顔を覗き込んだ事で、僕の足は大地に根を張り巡らせたかのように動かなくなつてしまつた。更にルイズに見られていると感じるだけで、嬉しさのあまり顔が紅潮していく。なにこの乙女ティック思考回路。

何の目的で誰が あ、フランシアだ。

僕は昼食の後に『タイが曲がつていてよ？』『お姉様……』なやり取りをした事を思い出した。あの時フランシアがこれの原因を僕の胸元に付けたのだらう。

「ミス・アリアはどうかしたのかい？」

「わからないわ。なんか妙に目がつるつるしてゐるけど

ルイズが他の人と話している姿を見て、胸の奥がぎゅっと痛む。

フランシアめ。何が目的かは知らないけど絶対殺す。

そんな事を考えながら、僕はルイズの手を握った。

「る、るるるルイズ？」

「なに？」

「わ、私といいい一緒に散歩……してくればせんか？」

「はあ？ いきなり何よ？ てゆーかなんかあんたの目、なんかおかしくない？」

そりゃあメダパニッてるでしょうね。

何故か恥ずかしがり屋になつてている僕はこうやつて誘うのが精一杯だった。そしてルイズが答えてくれない事を悲しく思い、泣きそうになつてしまっていた。

「ルイズはっ……私と、散歩するの……いや、なんですか？」

「えつ？ エツ？」

「ルイズのバカ！ だいつきらこつ……！」

「あ、アリアーつ……！」

なんかもう頭の中が意味不明なぐらいグチャグチャになつて僕は

走つて逃げた。

「おじクソメイド。お前、僕に何をした」

走つている内に薬の効果が切れ、僕はフランシアの部屋に急行し、そのドアを吹っ飛ばして中に入った。フランシアはそんな行動が予想通りだつたのか、紅茶を二人分入れて待つていた。

「お嬢様に新しい友達ができるない事を曰那様に報告したら『薬でも何でも使ってアリアの友達作りに協力しろ!』と命令されましたので、その通りに行動させていただきました」

「何の薬？ 惣れ薬つぽかつたけど」

「媚薬　　いえ、発情薬ですね。匂いを嗅いで最初に見た人に発情します。効果時間は短いですが」

フランシアの言葉に僕は吉本の漫才のようにすてーんと大袈裟に転んだ。

なんてもんを使ってんですか。しかも胸元の匂いを嗅ぐほど近い距離までいくつて、どう考へても友達以上じゃないと無理だ。友達作りの役に立つはずがない。更に友達作りとしているのに発情させてどうする。

あれ？ でもそれだと僕のアレが説明できない。ルイズのアレは確かに発情だったが、僕のアレはそうじやないと想つ。

「僕は発情薬とやら使つても手を握つて散歩に誘つ程度しかできなかつたんだけど？」

「ああ、それはお嬢様が実は超恥ずかしがり屋で実は純粹な乙女的な思考回路をしているからですね」

「有り得ない。僕が日常的にどれだけエロワードを使つてる？ もはや色欲の鍊金術師エロワード・エロティックだよー」

「にーさん！」

「それはルイズに言つてほしいかな」

まあ、たぶん性格が変わるような副作用でもあつたんだろう。ルイズの発情の仕方もなんかおかしかったし。

僕は一人で納得して、とりあえずフランシシアをエア・ハンマーで吹つ飛ばした。

すぐに立ち上がり無傷で服についた埃を払つていたけど気にしない。なんかたぶんコイツ人間じゃないんだろう。

そして、学名はヘンタイロリコンメイドとかかなあ、なんて考えながら僕はフランシシアに唾を吐き掛けて部屋を後にした。

第十八話 友達百人できません（後書き）

久しぶりに見た憧れのシンガーがメイクのせいか肌がボロボロになつていて、写真とかではわからないけど大変なんだなあ、なんて悲しい気持ちになった。

第十九話 けれど別に必要ない

自分の部屋に戻るうとしたら、ルイズが部屋の前に立っていた。おそらく先程の事についてだらう。

「……あつ」

誰かの気配を感じたらしく後ろを振り向いたルイズが、僕を見付けて小さく声を出す。そして最初は少し不安そうな表情だったが、すぐに睨むような表情に変わった。

「何処行つてたのよ」

「ちょっとフレーメンロード渡つてた」

「……？」

ルイズははてな顔。ハルケギニアにそんな物騒なモノもゲームないから当然だらう。フランシアは「1000万？ お前が手にできるのは1000万から儲金の（以下略）」とか返してきそうな気がするけど。

「まあ、いいわ。アリアが意味不明な事言つのはいつもの事だし」

「そんな事よりさつきの事なんだけど……」

もじもじと俯き、ぼそぼそと小さな声を出すルイズ。さつきはき

ゆんぎゅんしてたけど、今は別にしない。むしろハキハキ喋れって
イライラする。

「そ、散歩……行つてあげてもいいわよ?」

「いえ、結構ですう」

「えつ」

ルイズは手を差し出しながらぶいとそっぽを向く可愛らしい仕
種を見せてくれたが、僕は丁重にお断りした。ルイズはそれに対し
てぽかーんとマヌケな表情をし、意味がわからないと田を見開いて
いる。

「そんな事よりさつきの薔薇野郎でもからかいに行こうぜ」 そし
て身体中の穴という穴に薔薇をぶち込んでやろうですよー。」

「なにそれこわい」

身体に薔薇を植えたら、限りなく薔薇に近付けるよつな気がする
一。あると思います。

「もちろん眼球にも……毛穴にすら差し込んでやるゼ 行ぐぞ
ルイズ! ですです!」

「ちよ、待ちなさいよー。どう考へても死ぬわよー。」

「僕浮気性の人間つて大嫌いなんですよ」

前世では浮氣いっぱいしたけどな!」

「……流石に殺すのはマズイわよ」

さつきまで火薬を仕掛けるとか、爆殺するとか言つていたくせに、首を横に振るルイズ。基本的に常識人ですね。

「バカっ！ 常識に囚われていては、何も生まれない！ 何も生み出せない！ お前は凡人で一生を終えるつもりか！？ そんなの僕は嫌だッ！」

「はいはい、てゆーかいつまでも廊下で話してるとアレだし、さつさとあんたの部屋入るわよー」

「全ての人間は生まれた時は平等に何の価値もない！ そして生きていいく中で、自分に価値を作り出せるのはほんの一握りだ！ お前は無価値で終わるのか！？ 何もないままで」

「はいはい、近所迷惑だからさつさと部屋を開けなさい。部屋に入つたら聞いてあげるから」

「…………つまんない。さつきはなんかもじもじしてたくせに、今はもう、いつも通りに戻つている。

僕はちゃんと相手をしてくれない彼女に苛立ちながら、おとなしくドアを開けた。

女子寮の一室、ルイズの隣の隣、つまりキュルケの隣の部屋に僕の部屋はある。常識的に考えて、男子生徒が女子寮に侵入する事でも危ないのに、男子生徒が女子寮に住んでいるとかどんな悪ふざけなのだろう。お父様の過保護とお母様の趣味は理解できない。

そんな僕の部屋で、僕はベッドに腰掛け、ルイズは化粧台の椅子を僕の正面に運んでそれに座り、仲良く楽しく僕達は雑談をしている。いつものしようとしない、馬鹿らしい会話内容である。

「アリア！ あんたのその狡賢い頭脳をたまには普通に役立てなさい。今回の議題は『どうすれば友達ができるのか』よー！」

「脱いだらいいんじゃない？」

「そんな娼婦みたいな事できる訳ないでしょー？ てゆーか脱いだらどうやって友達ができるのよー？」

脱がされる 決闘 仲直りというパターンでキュルケは親友を作りました。

「もつとマシな方法考えなさいよ。あんたも白兎の君とかバカみたいな名前で呼ばれて遠くから眺められるだけなんて嫌でしょ？」

僕は大きく頷く。

それは確かにイヤだ。だいたい白兎の君って何だ。みんな真面目な顔で言っているけど、バカにしているようにしか聞こえない。

「それにアレよ？ 私なんか唯一の友達であるアリアをお、おお犯そつとして断られてフラれた……なんて噂が流れてるのよー。」

ついせつきの事なのに速いですね。閉鎖された学院の中では、娯楽になる噂が流れるのは速いみたいですね。

「魔法成功率『ゼロ』、友達も『ゼロ』のルイズとか本氣で爆殺してやうかしら……」

ルイズさんがアップを始めたようです。

「だ・か・ら！ 一刻も早く私たちは友達を作つて変なイメージを消し去らなきやいけないのよ！ イメージだけで本物を知らないくせに知つているつもりなヤツらに眞実を教えていかなきゃいけないのよ！」

だから意味がわからないけど、ルイズは随分気合いが入つてゐる。立ち上がりながら拳を握りしめ、天高く突き上げて、椅子に足を乗せながら熱く語つていた。

「でもさ、友達作ると人間強度が下がるとか言つてなかつた？」

「あんたバカア？ 私レベルになると少し下がるぐらい問題ないに決まってるじゃない」

溜息を吐きながらダメな子を見る目を向けるルイズに殺意が芽生えた。

ぶち殺すぞ、ヒューマンッ！！

「ほんとアリアはダメなんだから……」

ルイズは更に調子に乗り出す。10年会わない間に成長したものだ。まさかルイズと一緒にダメなんて言われるとは。

必ず報復してやる。

「ほら、さつさとアイディア出しなさい」

先程の事をたいした事がなかつた事にしながら話を続けるルイズに、じめかみがピクピクと動き、顔が引き攣るのを感じるが今は我慢する。

今簡単に仕返しするだけなら楽勝だが、それではつまらない。

「優しい態度で接する」

「却下。それじゃあ罰められるわ

お前はヤンキーか。

「爆発させたら謝罪する」

「却下。爆発するのは私のせいじゃないもの」

血口中心的過激なヨルイズ。

「キヤツを変える」

「却下。ありのままの私と仲良くしたい人しかいらないわ

それハードルがアルビオンの高さより高いですよ。

「奢つたりして餌付ける

「却下。お金で釣れる小さい人間に興味ないわ

友達少ないくせに自分では何もしないで相手に条件作ってこじかねえですよ。

「どうあえず自分が話して掛けてみる」

「却下。そんなの惨めじゃない

なんとこうプライドの高さ。ベジータ様かお前は。

「面白い格好をして注目を浴びる

「却下。私はハロジやないわ。もっとマサモアハイティア出しな

「あこが

「自分で考えるバカ

僕はそう言い捨てて、ベジタ勢によく倒れ込む。

流石にもう諦めた。ルーズが満足するアイディアなんておもうへりあへ一生出て来ない。考えていた内に学院生活が終わる。

「ああ、ちゅうとー?」

だいたいアレだ。最初からルイズに友達を作る方法を考えてあげるなんて無駄だったのだ。

我儘で、プライドが高くて、意地つ張りで、見えつ張りで、素直になれない性格の人間なんて、自分から積極的に動かなきゃ友達なんて作れない。関わる機会がなければ友達なんてできるはずがない。自分から行動しないで、待ってるだけじゃ何も変化しないのだ。

「……アリアは友達ほしくないの？」

「別にいらない。玩具がたくさんあつたらどれで遊ぶか迷っちゃうし。それに僕はたくさんの友達より小数の親友派だし」

「玩具つて……、でもそうね。確かに小数の大切な親友がいる事の方が素晴らしいわ！ 私にはアリアや姫様、それに一応フランシアだっているし！」

いつの間にか友達から親友に進化していたようです。ちなみに友達や親友の状態からジョグレス進化をすれば最低でも恋人関係になるそうだ。間違えてセフレ関係に進化する場合もあるそうだが。

更にちなみにトリステインでは結婚関係までワープ進化してしまう。

「そうね！ 友達なんかいらないのよー！」

ルイズは他人が聞いたら強がりにしか聞こえない事を言い出した。

「今いる親友を大切に！ アリア！ 私達の友情を深めていくわよ！？ えいえいおーーー！」

「えいえいおー」

「棒読みじゃない!? もうと元気よく! えいえいおー!-」

「えいえいおー」

なんだこれは……バカみたいじやないか。

僕がそんな事を考えていても、ルイズは自分達の行動を全く気がしている様子がない。

流石原作で『今日は貴方が御主人様にやん』とかやつていた人間だ。思い込んだら一直線、猪突猛進の猪つ娘だ。

「えいえいおーーー！」

「えいえいおー」

えいえいおーーー！」

えい!! えい!! おー!! ツ!!

えいえいおー

この掛け声を繰り返す謎の儀式は、サイレントをかけて深夜3時まで続いたのだった。

第十九話 けれど別に必要ない（後書き）

F r i d a y o f t h i s w e e k i s p l e a s u r
e .
I t i s b e c a u s e « B E C K » b r o a d c a s t
s .
D o y o u w a t c h t h e b r o a d c a s t ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4963x/>

うさぎさんの楽しい毎日

2011年11月8日21時06分発行